

記憶すること,歴史を叙述すること
-ウファーにあるふたつのモニュメントが語るもの-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊川, 浩一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21024

記憶すること, 歴史を叙述すること —ウファーにあるふたつのモニュメントが語るもの—

豊川浩一

要旨 ロシア連邦バシコルトスタン共和国の首都ウファーにはほぼ同時期に建立されたロシア人とバシキール人の相反する関係を示すふたつのモニュメントがある。ひとつはバシキール人のロシア国家への「自発的併合」400年を記念して建てられた「民族友好記念碑」であり、いまひとつは民族の英雄サラヴァト・ユラーエフの馬上像である。

前者はバシキール人が自らの意思でロシア国家の一員となり、両者の関係が常に「友好的である」ことを示している。後者はロシアが推進する植民政策に強く反対してプガチョーフ叛乱に積極的に参加し、鎮圧後に故郷から遙か遠くのバルト海沿岸に流刑されて没した人物を顕彰するものである。両者とも歴史的事実の一面を伝える記念碑であるが、それぞれが友好とプロテストというロシア国家への相反するバシキール人の姿勢を示しているのは、この地域ひいてはロシア国家と民族の歴史を考える上で示唆的である。

たしかに16世紀中葉以来、バシキール人はロシア国家の一員となってからロシアと密接な関係を結んできた。しかしその過程でバシキール人は多くの辛酸をなめたのである。ふたつの記念碑はまったく反対のバシキール人の姿勢を示しているが、バシキール人とロシア国家との関係は友好とプロテストの間で揺れ動いてきたのである。

18世紀以来の歴史家は、両者の関係を念頭に置きつつ、どこに重点を置くか—すなわちバシキール社会の本質は何か—に頭を悩ませてきた。そうしたなか、時代に翻弄されながらも独自の歴史観を打ち立てた歴史家が現れた。リュバーフスキーである。彼によって、バシキール史がロシア史のアクターとして論じられるようになり、バシキール史研究が大いに発展した。

現在のバシコルトスタンにおいては、サラヴァト・ユラーエフに関する学問的高まりを示す事例に溢れている。しかしその背景には、自民族の英雄を顕彰することによって民族意識を高揚したいという共和国当局の思惑もある。

キーワード：歴史叙述, 史料, 記念碑, 記憶, サラヴァト・ユラーエフ

はじめに

ロシア連邦バシコルトスタン共和国の首都ウファーにはほぼ同時期に建立されたロシア人とバシキール人の相反する関係を示すふたつのモニュメントがある。ひとつはバシキーリアのロシア国家への「自発的併合」400年を記念して1965年に建てられた「民族友好記念碑」（台座には1557～1957年と記されている。写真1～4）であり、いまひとつは2年後の67年に建てられた民族の英雄サラヴァト・ユラーエフの馬上像（写真5・6）である。ともに64年に政権の座についたブレジネフの時代初期の記念碑である。前者はバシキール人が自らの意思でロシア国家の一員となり、両者の関係が常に「友好的である」ことを示している。後者はロシアが推進する植民政策に強く反対してプガチョーフ叛乱（1773～1775年）に積極的に参加し、鎮圧後に故郷から遙か遠くの地に流刑されて没した人物を顕彰するものである。両者とも歴史的事実の一面を伝えるモニュメントであるが、それぞれが友好とプロテストというロシア国家への相反するバシキール人の姿勢を示しているのは、この地域ひいてはロシア国家と民族の歴史を考える上で示唆的である⁽¹⁾。

現在、サラヴァト・ユラーエフを顕彰する胸像や銅像がバシコルトスタン共和国各地に存在する。たとえば、彼の故郷で共和国北東に位置する現サラヴァト地区（当時のシベリア道ウファ郡シャイタン＝クデイスク郷）のサラヴァト博物館前にはその胸像（写真7）がある。またソ連時代末期の1989年、彼が叛乱鎮圧後に流刑されて没した現エストニア共和国パルディスキ市（当時はバルティースキー・ポルトあるいはロゲルヴィクと呼ばれていた）にもまったく同様な胸像（写真8）が建てられた。その胸像は、94年に盗難の被害にあったものの、3年後には同じ場所に胸像が再び据えられた。2017年にはいま一度修復され、パルディスキ市役所にもサラヴァトを記念するプレートが打ち付けられたのである。

本稿は、文書史料や記憶がどのように残され、またそれを利用していかに歴史叙述がなされるのかを考察しようとするものである。具体的にはバシコルトスタンに存在するさまざまな記念碑、口伝史料「シェジェレ」に残された過去の記憶、民族の英雄サラヴァト・ユラーエフをめぐる言説を手掛かりとして、バシキール人が過去をどのように認識し、それをどのように叙述してきたのかを考えてみよう⁽²⁾。

第1章 記憶と歴史叙述

第1節 過去の記憶とどう向き合うのか

過去の記憶と歴史認識が政治の争点となり、国際的な対立や紛争を引き起こす事例は多くの国や地域で見られる⁽³⁾。そのことが最重要の政治的資源として位置付けられている地域にバルト地域やカフカース地方など旧ソ連邦を構成した国や地域がある⁽⁴⁾。それ以外でも、たとえば政

治問題化しなくとも、国や地域には歴史の上で忘れることのできない記憶があり、それが各地の民族にとって固有のアイデンティティを形成している場合がある⁽⁵⁾。

なかでも戦争にまつわる記憶は複雑な問題を孕んでいる。現在、とくに日本と隣接する国々との間で歴史認識について問題が浮上しているように、容易に解決できるものではない。しかしヨーロッパでは、ドイツが同じように近隣諸国と対話を重ね、教科書ではどのように戦争とくに第二次世界大戦を描くかということ話し合った経験は、われわれがどのように歴史を叙述することができるのかを考える上で貴重である⁽⁶⁾。

戦争に関する記念行事や記念碑は世界中どこにも見られるのだが、このほかロシアにはそれが多くのように思われる。第二次世界大戦でおよそ2000万人以上の死者を出したことがそうさせたのかもしれない⁽⁷⁾。記念日としては、5月9日の対独戦勝記念日が国民の祝日とされ、戦没者の墓地や記念碑としては、クレムリンの横にある無名戦士の墓やペテルブルク近郊のピスカリョーフ墓地、そしてボルゴグラードのママイの丘に建つ母なる祖国像などがある。この他に、ペテルブルクの中心地の建物にはドイツ軍により包囲されて砲撃を受けた傷跡が記念碑としてそのことを記したレリーフと共に残っていたが、驚くことに近年それが消された。ロシア以外でも、オーストリアのウィーンにソ連軍による第二次世界大戦勝利記念およびヨーロッパ解放記念を示す「赤軍英雄記念碑」が建っている。そして著者が従来から関心を寄せているバシコルトスタンに限っても多くのそしてさまざまな記念碑が存在しているのである⁽⁸⁾。

第2節 記憶と記念碑

人間のたどった歴史を跡付ける方法は幾つもある。従来、歴史家は古文書館に眠っている文書史料を中心に歴史を分析して叙述してきた。しかし最近では、映像資料の発掘、記憶の呼び起こしと文字史料以外のさまざまな史料を利用してそれが行なわれるようになった。なかでも人類共通の記憶として留め置かねばならないものに、ホロコーストを含む戦争の被害や災害など、多くの人々を巻き込んだ悲劇的な出来事がある。

現在、一方では、確かにバシコルトスタンの「公式」歴史学は「併合」を否定的にとらえてはおらず、むしろ民族を発展させる上で力があつたとしている。他方で、サラヴァト・ユラーエフの動きに象徴される民族解放運動をも高く評価する。このことは矛盾しているようにみえる。だからこそ、なぜウファーにふたつのモニュメントが存在しているのか、その理由を考えることをわれわれに求めているのである。それはすなわちバシコルトスタンがロシア国家とどのような関係を紡いできたのかという歴史道程の探求そのものである。とはいえ現代の若きバシキール人歴史家 M. M. ズリカリナーエフはそこに矛盾はないという。サラヴァトが闘ったのはロシア帝国内の虐げられている全民衆のためであり、それは諸民族がともに立ち上がることを意味していたのだという⁽⁹⁾。これはいわば帝政時代のロシアは「民族の牢獄」であつたと

いう旧ソ連史学的な発想ではあるが、実はこうした観点もバシコルトスタン史学の一定の層を形成しているだけに無視することはできない。

本稿では、以上の点を踏まえた上で、プガチョーフ叛乱で活躍したサラヴァト・ユラーエフを念頭に置きながら、16世紀中葉以後のロシア国家が推し進めた植民の様子をも考慮して議論することになる⁽¹⁰⁾。この地方へ派遣されたロシア人官僚や行政官たちのなかには（とくに最初期のИ. К. キリーロフやА. А. プチャーチンなど）、バシキール人を「未開」の人々であると考え、彼らを「根絶」しても構わないという態度をとる人々がいた⁽¹¹⁾。それがロシア植民政策のいわば通奏低音となっていた感さえある。他方、地方住民はそうした態度に激しく反発した。プガチョーフ叛乱時、攻撃を受けた工場管理人から工場主に宛てた報告によると、工場は完全に空虚となっていて、それが存在した場所はただ荒涼さ以外何も残っていないほどであった⁽¹²⁾。

上記の問題を検討するうえで、筆者は、1980年代以降、フランスの歴史学界で生まれ、その後日本にも影響を与えて頻繁に使われるようになった「記憶」という見方に注目する。そこでの議論は国民国家の形成の過程について、従来の批判的視座として提出された「伝統の創造論（エリック・ホブズボーム）や「想像の共同体」論（ベネディクト・アンダーソン）を前提としつつも、「集合的記憶を表象する場」（ピエール・ノラ）を重視するというものである。そうすることによって、現在のなかにある過去を時系列という呪縛から解放し読み替えることができるのかもしれない⁽¹³⁾。

国家を形成することのなかったバシキール人は、現在からみて過去のなかに、一体何を民族の「記憶」に留めようとし、何を「忘却」しようとしたのか。また逆に、過去は現在のバシキール人に何をもたらしたのか。つまるところバシキール人は自民族の歴史をどのように認識し、アイデンティティを形成していったのかということである⁽¹⁴⁾。

事実、18世紀ロシア政府はプガチョーフ叛乱の記憶を消し去ろうとした。プガチョーフの生家を破壊し、彼の育ったジモヴェイスカヤ大村（Зимовейская станица）を別の場所に移し、叛乱の中心地域を想起させる地名を変更した。ヤイーク川をウラル川に、ヤイークをウラリスクに変えたのはその最たる例である⁽¹⁵⁾。そしてサラヴァトを始めとする叛乱参加者は南ウラルのバシキールから遠く離れたバルト海沿岸へ流刑された。だからこそ、記憶に焦点を当てて考える重要性がある。

第2章 記憶から歴史叙述へ

第1節 バシキール史の特徴

民族の記憶

ロシアの南ウラル地方を考える際には幾つか念頭に置かなければならない点がある。第1に、

この地方の住民は自らの民族の英雄や歴史を記憶しているという点である。バシキール人にとって重要なのが口承の伝統であり、それが「シェジェレ」(系統樹)となって残っている。現在においても、バシキール人は自らに至る10代前ないし15代前までの先祖の事績を記憶していなければならない。20世紀初頭まで書き言葉を持たなかったバシキール人は先祖の系譜と歴史を記憶し、それを次の世代に伝えていった。「シェジェレ」そのものは氏族毎・種族毎に、あるいは家毎に伝えられたが、後にそれがいわば民族全体の史料となって残ったのである。

著者と同じ年代のバシキール人の友人は、サラヴァト・ユラーエフと並んで英雄視されプガチョーフ叛乱で活躍した有名な指導者キンジャ・アルスラーノフの末裔だという。友人は、この英雄にまで辿ることのできる印刷した現代版「シェジェレ」を著者に見せてくれた(写真9)。また、その甥が私家版として自らの家の記録を英語で書いた「シェジェレ」を筆者に贈呈してくれた。それらは「シェジェレ」の伝統が現代に至るまで息づいていることの証なのである。

ロシアの植民政策と「植民国家」への道

第2に、この地方の歴史を検討する場合、ロシア国家が推進した植民政策と民族政策を抜きにして考えることはできないという点である。植民およびそれによって引き起こされる民族の問題は紛れもなくロシア史を構成する重要な要素である。またロシア史をすぐれて植民の歴史としてとらえる見方は帝政時代以来の伝統的なロシア史観といえる。ロシア史に関する植民理論の成立と発展はそれ自体ロシア史学史における重要なテーマである⁽¹⁶⁾。帝政時代の著名な歴史家C. M. ソロヴィヨーフ(1820～79)とB. O. クリュチューフスキー(1841～1911)のモスクワ帝国大学の子弟は、「ロシアの歴史は植民された国土の歴史である」と規定した⁽¹⁷⁾。このテーゼはクリュチューフスキーの弟子でモスクワ帝国大学学長も務め、革命後に「ブルジョア史学」のレッテルを貼られてウファーに流された「国家学派」の指導者の一人M. K. リュバーフスキー(1860～1936)にも受け継がれて大いに発展した⁽¹⁸⁾。

しかし実際のロシア国家による植民は入植した先々でいろいろな問題を引き起こすことになる。とりわけ16世紀中葉以降、モスクワ国家が諸民族を抱え込むようになってからはなおのことそれが顕著になった。それと同時に、ロシア国家は植民によって国家を拡大する「植民国家」としての道を歩むことになったのである⁽¹⁹⁾。

「自発的併合」をめぐる議論

第3に、歴史的にバシキール人とロシア国家との関係構築の過程を考えることの重要性である。一方で、ロシア国家の側から見れば植民の歴史であるが、他方で、バシキール人の側からすれば侵略された歴史である。われわれはそうした点をどのように考えればよいのであろうか。

かつてのソ連史学は、バシキール人を含めたヴォルガ・ウラル地方、さらにはカフカース地

方に住む諸民族の動きをロシア国家への「自発的併合」と定式化し、ロシア国家の領土拡大の歴史を肯定してきた。これは遅れていた地方社会が「併合」によって進んでいたロシア国家によって歩みを早めたとする「スターリン・テーゼ」を受けたものであるが、現在ではそうした考えには問題があるとされ、とくに旧ソ連構成国家であったカザフスタンおよび現ロシア連邦に留まっているタタリスタンの歴史学がこの定式を完全に否定している。しかしながら、現代バシコルトスタンの歴史学はそれを否定も修正もせず、むしろ「自発的併合」を再確認しているように見える⁽²⁰⁾。そこにはロシアとの関係を重視せざるをえない政治力学が働いていると考えられる。とはいえその抵抗の歴史を見ると、バシキール人のロシア国家への臣従過程を平和的な「自発的併合」であったと決め付けるのは性急に過ぎるであろう。ここではその問題に深入りする余裕はないが⁽²¹⁾、バシキール人がロシア国家と臣従の契約を結んだことには間違いはない。その事実から問題を考えていかねばならない。

以上の点に関して、諸民族とロシア国家との関係について論文を著している現代ロシアの歴史家 B. B. トレパヴロフは、バシキール人とロシアの相互関係について従来の手法とは別の新しい研究方法を提唱する。すなわちバシキール人がロシア国家を構成するメンバーとなるべくそれまでとは異なる条件で段階的に、すなわちロシア国家の政治体制と立法、学問と文化に適応していったこと、以上を明確な方法で示すべきだということである⁽²²⁾。そこには「自発的併合」というかつての教条的な見方はもはや存在しない。

蜂起と叛乱の多発という特徴

第4に、帝政時代におけるバシキール人の度重なる蜂起や叛乱の激烈さとそれに対するロシア側の過酷な対応がある。ロシア帝国史上、これほど多くのそして激しい蜂起や叛乱を間歇的かつ長期にわたって起こした民族がかつてあったであろうか。とりわけ17世紀中葉からプガチョーフ叛乱勃発の18世紀後半まで、否、その後においてさえ、他の民族には見られない程数多くの蜂起・叛乱が続いたのは紛れもない事実なのである。上述のリュバーフスキーはバシキール人の蜂起を前例のない未曾有の歴史的現象であると規定しながら、これこそがバシキール史の本質であるとした⁽²³⁾。

2014年6月、筆者がウファー教育大学で講演した際、聴衆のなかにいた著名なバシキール人文学研究者が、なぜバシキール人はかくも多くの蜂起や叛乱を起こしたと思うかと質問した⁽²⁴⁾。バシキール人ではない筆者にこのような質問をしたこと自体奇妙ではあるが、現在に至るもこの点はバシキール人の間で議論され、かつ大きな問題となっている証拠でもあろう。また質問の背景には、18世紀末までロシア支配に抵抗を示し蜂起してきたバシキール人と、19世紀以降ロシアの政治や社会の規範に準拠して生きる道を選んだバシキール人の葛藤の存在を想起させるのである。

蜂起や叛乱の原因とその運動の過程については本稿では省かざるを得ないが、基本的には、「自発的併合」時にロシア国家と交わした契約のロシア国家側の違反という想いがバシキール人を蜂起に駆り立てたと考えることができよう⁽²⁵⁾。

叛乱鎮圧後の英雄たちの運命

第5に、ブガチョーフ叛乱が鎮圧され拘束された後のサラヴァトとユライの生活についての問題がある。叛乱鎮圧後、ブガチョーフが早くも1775年1月にモスクワで処刑された一方で、バシキール人指導者は、攻撃した地域や工場で鞭打ちなどの拷問を受けた後、彼らの故郷から遠く離れたバルト海に臨むロゲルヴィクに流刑された。

この点について考えることは、単に叛乱に参加した英雄の人生の終わり方を検討するというだけにとどまらない。それは拘束後の囚人をめぐる当時の地方当局の監視・管理体制、監獄のある地方の特殊性、地方と中央との関係、そして何よりもロシア帝国という国家の姿を問うものでもある。なお、この問題についての研究史ならびに史料を含めた概要はかつて述べたことがあるので繰り返しは避けるが⁽²⁶⁾、史料がエストニアにあるため、ソ連崩壊を境に現在に至るまでバシキール人による研究には進展がみられないのも事実である。またソ連時代の研究自体も史料の紹介が主眼であり、史料の分析を通して地方史研究の新たな地平を切り開くまでには至っていない。

第2節 「自発的併合」を示す史料

イヴァン四世の呼びかけ

バシキール人とロシアの直接的な関係は16世紀に始まる⁽²⁷⁾。それ以前、バシキール人はカザン・ハン国、シビル・ハン国そしてノガイ・オルダの3勢力により分割され支配されていた。境界を接するモスクワ国家はこれらの勢力との関係に配慮しなければならなかった。16世紀中葉までにイヴァン四世（雷帝、在位1533～84）のモスクワ政府はカザン・ハン国に対して積極的外交と武力による問題解決の道を選んだ。1546年末、ヴォルガ右岸に住んでいたチュヴァーシ人、マリ人、モルドヴァ人は自らを守るためにロシア国家の庇護を望むという請願書を携えた使節をモスクワに派遣した。これに対して、ツァーリは使節にヤサーク納入の義務負担を軽くする「恵与状」を与え、これを受けて同地の人々はロシアのカザン遠征に参加した⁽²⁸⁾。チュヴァーシ人とマリ人のロシアへ帰属する動きが他の地域の住民にも影響を与えることになった⁽²⁹⁾。

バシキール人、モルドヴァ人、チュヴァーシ人、マリ人そしてウドムルト人がイヴァン四世のもとにやって来るのを見て、ツァーリはモスクワに帰還した。モスクワに戻る前にイヴァンは、「全ウルスのヤサーク民に対し、何も恐れることなく君主のもとにやって来るようにとい

う重要な恵与状を与えた。悪事をなした者を神は復讐した。君主は彼らを許し、彼らが以前カザンのハンたちに払っていたヤサークを納めるように」と語った⁽³⁰⁾。沿ヴォルガの諸民族は恵与状の約束に惹かれツァーリの呼び掛けに応じて臣従する意向を示し、ヤサークを納める用意があることを表明したのである⁽³¹⁾。

臣従を示す口伝史料「シェジェレ」

バシキール人の口伝史料である「シェジェレ」によると、バシキーリアへは軍隊の代わりに「恵与状を持った使節が派遣された。彼らは次のことを〔バシキール人に——筆者。以下カギ括弧は筆者による補足。〕知らせた。すなわち誰も逃げることなく各々自らの信仰を守って〔その地に〕止まり、自らの習慣を遵守するように」⁽³²⁾。また今ではその多くが喪失してしまった史料を駆使して『ロシア国家史』（1816～29年刊）を書いたロシア最初の歴史家の一人 H. M. カラムジーン（1766～1826）は次のように述べる。「灰と墓で満ちているこの不幸な土地にイオアン〔すなわちイヴァン四世〕は小姓のセミヨーン・ヤールツェフを派遣した。その際、彼には戦いの恐怖は過ぎ去り、人々は白きツァーリ〔＝イヴァン四世〕の忠実な臣下として平穩のうちに幸福でいることができる、と宣言させたのである」⁽³³⁾。

イヴァン四世の恵与状を受け取った後に、バシキール人諸種族は臣従する旨を「白きツァーリ」に伝えることにした。「シェジェレ」は、平和と安寧、習慣、宗教、およびハンに対する専制的支配の撤廃とヤサークの軽減を約束したツァーリの恵与状がいかにバシキール人に強い印象を与えたかを強調している⁽³⁴⁾。

結局、上記のツァーリの恵与状をバシキール人は受け容れることになった。最初はかつてカザン・ハン国支配下にあった西バシキーリアの諸種族が、ついでノガイ・オルダの支配下にあった中央部および南部のバシキール人が、そして最後にシビル・ハン国支配下の北東バシキーリアの人々がロシアに臣従した。現存する史料はバシキーリア全域で以上のことが行われたことを示している。

そのなかからバシキーリア中央部・南部に位置し、史料の上でも特徴的なユルマティン族の場合を取り上げてみよう。この種族はかつてノガイ・オルダの支配下において、氏族長の指揮の下に連合した四氏族から成り立っていた。彼らはベーラヤ川中流域とその支流に至るバシキーリア中央の大きな部分を占めていた。モスクワ国家に圧迫されてクバンに移住したノガイ人たちは、ユルマティン族に自分たちにつき従うことを求めたがそれには従わず、ロシア国家に臣従する道を選んだのである。

ユルマティン族の「シェジェレ」はバシキール人諸種族に伝わる口伝史料のなかでもロシアとの関係をより具体的に明示する史料である。まず自種族の起源をチングス・ハーンに求め、その子孫の一人トゥハル・シャガリ・ビイを自らの長としたという伝承から始まり、古くから

この地をノガイ人たちが支配していたという。ブルナク・ビイの時代、飢饉に見舞われ、また北方からこの地に多くのロシア人がやって来た。ノガイ人は逃げ出し、ブルナク・ビイは同地方に止まることに決めた。その後、次のような記述が続く。

ブルナク・ビイが死去すると、ビイの地位はタチガチに委ねられた。タチガチがビイになったのは959〔年。ヘジラ暦。西暦1551／52年〕、ネズミの年であった。さそり座の2日目〔10月2日〕、ロシア人は都邑カザンを占領した。その後、白きビイが王〔すなわちここではロシアのツァーリを指す〕となった。961年〔ヘジラ暦。西暦1553／54年〕のことであった。その年、あらゆる地方に次のことを知らせる恵与状を持った使者たちが派遣された。いわく、「たとえ、何人も逃げ隠れすることなく、各人已の宗教〔イスラーム〕に従い、また己の習慣を守ることができるように」、と。この使者たちが〔バシキール人の土地を〕くまなくめぐり、知らせたのは961年であった。かくしてタチガチ・ビイである私は何か別のことを考え出す余裕もなく3チューバの人々から3名を、すなわちまず何よりもアズナ・バーバ、第2にイルチクティメル・バーバ、第3にカルムイシ・バーバ、〔そして私を含めた〕総勢4名で、さらには何人かの友人である仲間と連れ立って都邑へ赴き、白きビイたる王に臣従した。〔これに対し、われわれは〕王から褒美と繻子を受け取った。王に対し、「われわれは300戸の〔バシキール人の〕代表である」ことを伝えた。逃げ去ったノガイ人たちが打ち捨てた土地〔の下賜〕を、頭を低くして懇願した後、自分たちのものとして受け取ったのである。〔王は〕境を〔ベーラヤ川の〕上流域のヌグシ〔川から〕河口付近のククシ下流域〔まで〕として、〔さらに、これらの川に〕その両側から流れ込む川やステップ、山や断崖を含めて、〔土地を〕下賜した。〔われわれは〕ヤサークを貂の毛皮で納めることを約束した。この後、白きビイである王は、私タチガチにムルザの位を下賜し、アズナを長老とした。その後、故郷に帰り、私はすべての人々を集めて次のように語った。「ああ、同族の者たちよ。私は白きビイたる王の所に行き、そのもとに従うことにし〔彼の〕奴隷となった。私タチガチに対し、王はムルザの位を下賜し、アズナは長老となった。頭を低くして王に懇願し、逃げ去ったノガイ人の土地を自分たちのものとして受け取った。貂の毛皮100枚をヤサークとして納めることに同意した。今後とも、皆の衆は〔これらすべてを〕果たして受け容れるだろうか」と私は問うた。すると、全民衆は、よし、と言った。私たちは皆、心から同意したのである。〔中略〕ツァーリが私にムルザ〔の位〕を下賜し、ムルザにはヤサークを課さないのだと私が述べると、人々は次のように答えた。「王の意思を認めよう」。〔中略〕62年〔962年。ヘジラ暦。西暦1554／55年〕に入ると、白きビイたるツァーリのもとから一人の商人がやって来た。私タチガチと長老アズナ、その後カルムイシとともにイルチケイ・ティメルに告げ知らせ、私たちは100匹

の貂を〔1字不明〕モスクワに届け、ツァーリに納めた。〔自分たちの間で〕これらの土地を分割することについて記した後、モスクワの台帳の中で確認された。そしてこの台帳に従って、毎年ヤサークを私たちは支払ったのである⁽³⁵⁾。

第3節 サラヴァトとユライの活動

サラヴァトとユライ

ロシア帝国最大級の民衆叛乱に自民族を率いて参加したサラヴァト・ユラーエフとその父ユライ・アズナリンの生年については不明な点が多い⁽³⁶⁾。ただ一つ確かな点は、二人ともシベリア道ウファー郡シャイタン＝クデイスク郷テケエヴォ（テコエヴォ）村に生まれ、ユラーエヴォ村で暮らしていたということである⁽³⁷⁾。すなわち現在のバシコルトスタン共和国北東部サラヴァト地区（現在の行政の中心はマロヤズ）に生まれ育った。父ユライ・アズナリンは1729／30年に生まれている。サラヴァトの生年は、プガチーフ叛乱後の尋問記録によると、1754年3～10月であり⁽³⁸⁾、史料によっては1752年⁽³⁹⁾、あるいは1755年⁽⁴⁰⁾である。いずれにせよプガチーフ叛乱時にはサラヴァトは20歳前後の若さであり、父は43／44歳という壮年であった。現在、バシコルトスタンでは、1754年を生年とし、6月16日をサラヴァトの誕生日として記念され、毎年祭典が催されている。

サラヴァト裁判からわかること

サラヴァト・ユラーエフについては、その逮捕後の裁判史料が残されている。尋問は彼が拘束された日（1774年11月25日）から数えてちょうど3か月経った1775年2月25日、モスクワの機密調査局で開始された。史料によると、1773年11月にサラヴァトはプガチーフ軍に加わって戦闘を行い、叛乱に参加していた期間を通じて、戦闘以外で「誰も己の意思で、また自らの手で殺害を行わなかった」。そして、プガチーフを「真のロシア皇帝」と認め、同地方のバシキール人は皆彼に身を委ねていたという⁽⁴¹⁾。

1775年5月5日、サラヴァトと父ユライはウファーに移送され、審理が継続された。そこでも、提出された数々の告発に対し、サラヴァトは部分的にあるいはその半分までを認めはしたが、残りをすべて否認した。特に、モスクワでの陳述と同様に、ロシア人の殺害は意図して行なったものではないと主張した⁽⁴²⁾。当局は対応に苦慮し、証拠物件を提示し、陸軍少将Φ. Ю. フレイマーンの報告とサラヴァト逮捕の状況について、その任にあたったアルシェネーフスキー中佐の報告をサラヴァトに突きつけた。しかし、こうしたことも彼の罪状否認を覆すには至らなかったのである⁽⁴³⁾。

族長 = 郷長としてのユライ

ユライは族長および郷長として自分が果たした役割や任務について記憶に残っている限りふたつの出来事を挙げている。ひとつはカルムイク人追跡であり、いまひとつはポーランド遠征（バル連盟の鎮圧）である。1775年2月25日付のユライの供述記録によると、ユライは「カルムイク人逮捕のための遠征にも参加し、彼らを追って1年3か月の間追捕した」が、その部隊は「バシキール人300名から成っていた」という。次いで、「カルムイク人の鎮静化の後に」、彼は「他の10名の族長たちとともにバシキール人族長のクレイ・バルタシェフの指揮下ポーランドへ遠征した。3000名ものバシキール人がいた。そこからの撤退後、自分の村で暮らしたのである」⁽⁴⁴⁾。ちなみに、シベリア道カラータピンスク郷出身のクレイ・バルタシェフはプガチョーフ叛乱時には政府軍に加わり、北バシキールアで鎮圧にあたっていた⁽⁴⁵⁾。

これらふたつの出来事のほかに、ユライは1756～63年の七年戦争にも従軍し、同郷のバシキール人部隊を率いてプロイセン軍とも戦っている⁽⁴⁶⁾。

以上はユライ・アズナリンの活動の一面を特徴付けるものであり、プガチョーフ叛乱前夜まで、彼がロシア政府に対して忠実に族長 = 郷長の職務を果たしていたことを示している。同時に、国際関係のなかで発生した上記事件へのバシキール人による関与は、彼らがもはや南ウラルという地方の枠を越えて生きることを迫られていたことを明らかにしている。

しかしここで、われわれはユライの別の側面、すなわちバシキール人の利益を守るため当局に対して立ち上がったふたつの事件に注目する必要がある。ひとつは彼らの土地への工場建設に反対する行動であり、いまひとつは別のバシキール人族長による賄賂授受に抗議する行動であった。

18世紀中葉のバシキールアでは、農業植民以外に集中的な工場建設が進行していた。バシキール人の代表の一人としてユライは工場建設に反対した。当時、工場主への土地譲渡は土地売買登記証書の作成などを通して行われたが、こうした法的手続きも、証書作成にあたっては工場主側により実際の取り決めとは異なった虚偽の境界が記入される有り様であった。その後、実際に土地を入手する時には、工場主は契約に反して自分の都合の良いように一層多くの土地を獲得していった。その典型的な例を、工場主 Я. Б. トヴォルドウイシヨフとシャイタン＝クデイスク郷のバシキール人たちとの関係に見ることができる。

1759年3月16日、鉱山局はシム川沿いに工場を建設するという決定を下した⁽⁴⁷⁾。2年後の1761年、このシムスキー製鉄工場は早くも生産を開始した。しかし、シムスキー工場および近隣のカタフ＝イヴァノフスキー工場に対する土地貸与証書が正式に作成されたのは、やっとならば翌年8月21日になってのことである。このとき、オレンブルクではトヴォルドウイシヨフとその共同経営者である И. С. ミヤースニコフが、シャイタン＝クデイスク郷のバシキール人たちからその先祖代々の所有地のうち工場用地として必要な土地を60年間にわたり年20ルー

ブリで借りることとなった⁽⁴⁸⁾。この取り決めの際、ユライ・アズナリンとその郷のバシキール人たちはロシア政府の弾圧と不正を経験することになった。

1760年、工場主 Я. Б. トヴォルドゥイシヨフの要請により、ウファー郡当局はユライを長とするシャイタン＝クデイスク郷のバシキール人グループを召喚した。1739～40年の蜂起時に政府側に立った族長シガナイ・ブルチャコーフは数多くの権力濫用により43年に更迭されていた。その職務は事実上ユライが行っていたのである⁽⁴⁹⁾。

トヴォルドゥイシヨフ配下の工場管理人は、自分の主人にとってその郷内の土地が「必要である」にもかかわらず、バシキール人たちは土地譲渡に応じようとしないと申し立てた。これに対し、ウファー郡の最高責任者である軍政官は、彼らバシキール人たちがトヴォルドゥイシヨフ自身と交渉するという約束を取り付け、実際に郷の全員に諮らず幾人かと取り決めを結んだ。しかし、実際の話し合いの成果は上がらず、郷を煮やした工場主は当局に願ひ出て、土地の強制的な買収が一部執行できるよう求めたのである。当局はユライにオレンブルク県庁への出頭を要求したが、彼はそれを果たさなかった。ついに1762年、軍隊がユライとその仲間たちをトヴォルドゥイシヨフのいるカタフ＝イヴァノフスキー工場へ連行した。そこでバシキール人に対して県庁発布の命令が読み上げられ、土地貸与について有無を言わさぬ回答を迫った。ユライは契約締結のため地方の行政の中心地オレンブルクに行くことを当局に約束しなければならなかったのである⁽⁵⁰⁾。当時、シャイタン＝クデイスク郷の共同体では、ユライを中心とするグループと前族長シガナイ・ブルチャコーフが指導するグループとが対立していた。1760年のウファーでの交渉は、実際にはシガナイ・ブルチャコーフが当たった。彼は工場主の利益を図りながら、自らの立場を固めようと考えていたのである⁽⁵¹⁾。

ユライは工場主たちによる土地獲得の欺瞞的なやり方に憤慨して訴訟を起こしたが、結局は敗北した。しかもユライとともに自分たちの利益・権利を守るために立ち上がったバシキール人たちには、当時のお金で600ルーブリという莫大な罰金が科されることになった⁽⁵²⁾。

ユライに関する特筆すべきいまひとつの事件は、彼がバシキール人上層部の賄賂授受に対し断固たる反対行動をとったことである。それはバシキール人に課せられた軍役をめぐって発生した。軍役はバシキール人やミチャーリ人たちにとって大きな負担となった。なお、ユライの供述史料によると、軍役義務が重くはなかったという。しかしそれは己の罪を軽減させるために、いかに自分が政府に忠実であり、不満も抱いていなかったかを述べるための戦術と考えてよいであろう。実際の軍役が多くの人命を奪ったのは言うまでもないことである。たとえば、ポーランド遠征に従軍したバシキール人3000名のうち約250名が帰還しなかったといわれている⁽⁵³⁾。他方、富裕なバシキール人たちはこのような軍役を賄賂によって逃れ、それを貧しい人々に肩代わりさせていたのである。

このように、ユライは、一方では、バシキール人族長＝郷長として政府側の植民・民族政

策遂行の一翼を担いつつも、他方では、ひとたびバシキール人共同体の利益や権利がロシアの政策によって侵害された場合にはそれを守るために立ち上がったのである。

サラヴァト・ユラーエフの活動

自らの部族および民族のために戦ってきた父の存在は、サラヴァトの人間形成にとっても大きな影響を及ぼしたであろうことは疑う余地はない。とくにユライによって挑まれたロシア人による欺瞞および工場主に対する闘いは、プガチョーフ叛乱の際に立ち上がったサラヴァトにとってバシキール人と自らの家族の自由や権利を守るための義務と映じていたことであろう。

彼は幼少の頃から自分の家で自民族の苦難の歴史に関する母の哀歌や父による物語を聞いて育った。そのなかにはおそらく17～18世紀のバシキール人蜂起についての語りもあったであろう。夏には遊牧や牧畜の気儘な生活を通して、幸福な時代のバシキール人の英雄たちについての物語や歌そして伝説に耳を傾け、心を躍らせた。また自らも即興詩を作り、タタール語に通じ、さらにはイスラームの学者たちを驚かせるほどコーランについても詳しく知っていた⁽⁵⁴⁾。

彼は上層のバシキール人たちがその共同体構成員を激しく搾取する状況を己の目で見て知っていたのである。工場で働く様々な人々との交流を通して、トヴォルドゥイショフの所有する諸工場でバシキール人がいかに強制労働に苦しんでいるのかも理解していた。父がポーランド遠征で不在の時に、サラヴァトは父に代わって郷長＝族長としての職務を果たしてさえたのである⁽⁵⁵⁾。

カタフ＝イヴァノフスキー工場に対する攻撃

プガチョーフ叛乱時にユライとサラヴァトが最も激しく攻撃を加えた工場のひとつにカタフ＝イヴァノフスキー銑鉄溶解・鋳銅工場がある。その工場は、すでに述べたように、ユライの時代に故郷シャイタン＝クデイスク郷に建設された。なお、工場民の多くを古儀式派教徒が占めていたという点は重要である⁽⁵⁶⁾。当時、中央での弾圧を逃れてやってきた多くの古儀式派教徒がウラル地方全域に住んでいたのである。しかもこの工場はウファーからチェリャービンスクへ、またチェリャービンスクからクラスノウフィムスクへ至る途上の交通の要衝にあった。

プガチョーフとサラヴァトがオサ近郊へ移動した後、ユライはトヴォルドゥイシェフとミャースニコフが共同で所有する諸工場のうち主要な工場であるカタフ＝イヴァノフスキー工場への攻撃準備に入った。このことについて、ユライ自身尋問で次のように語っている。「われわれ長老たちは、一人の悪人〔プガチョーフ〕の後に、2000人ほど自分たちの仲間を集めて、6月19日、カタフスキー〔カタフ＝イヴァノフスキー〕工場を攻撃し始めた。・・・その工場を占領できなかったが、大勢で工場の付属村であるオルロフカ村へと前進し、その後ウスチ＝

カタフスキー工場を焼き払ったのである。その際、私が全員の上に立つ筆頭指揮官であった」⁽⁵⁷⁾。

同様な情報は他の史料にも見える。1774年6月16日付カタフ＝イヴァノフスキー工場事務所のウファー地方官房宛ての報告である。そのなかで、「3日目〔＝6月13日〕に、悪人ブガチョーフの指揮下、この工場へバシキール人たち、すなわちチェレフスカヤ郷のバシキール人で連隊長のアミン・イブラエフ、および2名のエサウール、クチュク・ムルタジンとヤサク・アブルガシモフが、総勢約600名を引き連れて接近し、ここカタフ＝イヴァノフスキー工場を攻撃した」。翌日、工場の人々は話し合いのため工場に派遣されたバシキール人を捕虜にした。その捕虜は次のように伝えた。「サラヴァトの父であるシェイタン〔シャイタン〕＝クデイスク郷の叛乱者にして長老のユライは、この工場を破壊すべく援軍として部隊を引き連れてやって来た。そして彼は自分の指揮下に約1500名の人々を集めたのである」⁽⁵⁸⁾。

ユライによると、彼らはカタフ＝イヴァノフスキー工場攻撃に失敗した後、ウスチ＝イヴァノフスキー工場およびその工場移住地の村々へ出かけていった。工場事務所の報告によると、「シムスコイ工場、ユルザン工場は完全に燃やされた。ウスチ＝カタフスコイ工場近郊にあるオルロフカ村、ヤラル村およびカラウロフカ村では、すべての牧場と大小の家畜が残らず掠奪されたのである」⁽⁵⁹⁾。

第3章 歴史を叙述する

第1節 叙述の歴史

バシキール人の歴史をどう見るか

バシキール人（現ロシア連邦バシコルトスタン共和国の基幹的住民）は、ロシア国家に臣従を誓ったとされる16世紀中葉以来、民族の自主自立の旗を掲げてモスクワ政府に幾度も抵抗を示した。しかも特徴的なことに、抵抗の主な形態である蜂起は18世紀の終わりまで止むことなく続いた。そのため帝政時代のロシア人歴史家はバシキール人の蜂起を反動的とみなし、その歴史を遅れた野蛮なものと否定的に捉えた。

ソ連時代に入ると、諸民族の住む地方のロシア国家への「併合」を進歩的なものとする考え方によって、それに反対する動きはまたもや蜂起は反動的と見られた。しかしソ連時代後半にはバシキール人歴史家による自民族の歴史を肯定的に捉える研究が現れ、さらにはソ連崩壊を境に歴史学界は大きな変化を被った⁽⁶⁰⁾。たとえばバシコルトスタンの指導的な歴史家И. Г. Акумарノフが、17～18世紀のバシキール人蜂起はロシア史上のみならず地方史のうえでも大きな進歩的な事件であったとするのはその良い例である⁽⁶¹⁾。そうした状況を生み出す背景には、ソ連体制の崩壊という歴史的な大転換があったこと以外に、ソ連時代初期に流刑され、地方の歴史研究に向かわざるを得なかったにもかかわらず、バシキール人の歴史を掘り起こし、

後世の歴史家たちにも多大な影響を与えたロシア人歴史家 M. K. リュバーフスキーの再評価があったことを忘れてはならない。

18 世紀から革命までの研究

以下では、旧著と重複する部分であるが⁽⁶²⁾、研究状況を概観しておこう。バシコルトスタンの歴史について、B. H. タティーシチェフ（1686～1750）以来の伝統がある。現在に至るまで、どのような史料をタティーシチェフが利用して書いたのか結局のところ確定していないものの、彼はその『ロシア史』および『ロシア辞典』のなかで、18 世紀のバシキール史について述べている⁽⁶³⁾。またバシキール人との直接的な接触が、彼の視野を広げ、古代ロシア史の起源の問題に対する理解を深めさせ、同時にロシア史学において初めてバシキール人についての歴史的人類学的記述を行わせたのであろう。彼はバシキール人の発生について科学的に説明しようとした最初の人物であり、またバシキール人に関する誤った理解に対して反駁しようとする努力を⁽⁶⁴⁾。

バシキール史において最重要な問題とされてきた 1730 年代のオレンブルク遠征とそれが引き起こす蜂起については、П. И. ルイチコフ（1712～77）の『オレンブルク史』が重要である⁽⁶⁵⁾。そこではイヴァン・キリーロフが率いたオレンブルク遠征隊の編成の前提およびその初期の活動が詳しく描かれている。ルイチコフ自身がこの遠征隊および後に形成されるオレンブルク県の行政に直接携わっていたことがそうさせたのである。

これ以後の歴史家たちは同時代のバシキール人の動き、およびその原因となるロシア人による同地方への植民の問題を研究することに集中した。例えば、19 世紀に入ると、С. М. ソロヴィヨフが『太古からのロシア史』で、バシキール人蜂起について触れている箇所は少ないものの⁽⁶⁶⁾、オレンブルク遠征について一連の文書史料を利用して記述している。H. A. フィールソフの『1762 年までの新ロシアにおけるカザン・ハン国以前の異族人住民とカマ川以東の植民』⁽⁶⁷⁾では、18 世紀バシキールアにおけるロシア政府による行政の変化について深い分析がなされている。とくに 17 世紀のバシキール人蜂起と 18 世紀のそれとは異なることが明らかにされている。B. H. ヴィテフスキーの『ネプリューエフ、および 1758 年までの構成におけるオレンブルク地方』では多くの興味深い未刊行史料が利用されている⁽⁶⁸⁾。

19 世紀末から 20 世紀初頭は地方史と学術協会の活動が盛んとなる時期であった。この点で P. Г. イグナーチエフの『キリーロフ、オレンブルク地方の創設者』および『タティーシチェフ、オレンブルク地方の第 2 の長官』は重要である⁽⁶⁹⁾。同じく彼によって編纂された『ウファー県の記憶されるべき事件年代記』⁽⁷⁰⁾もわれわれの興味を引く。

革命前の研究で最も重要なのは A. И. ドブロスマイスロフによる『1735 年、1736 年および 1737 年のバシキール人蜂起』⁽⁷¹⁾である。彼はオレンブルク古文書委員会に勤務し、重要な史料

集⁽⁷²⁾をも編纂した人物である。その仕事はオレンブルク遠征隊についての膨大な地方のアルヒーフ史料に基づいて事件を詳細に叙述している。著者は、運動の原因として、バシキール人の不満が新たにやって来た住民—その多くは農奴制を逃れてやってきた逃亡農民である—による彼らの土地への居住および政府官僚の権力濫用という問題を指摘している。B. フィロネンコの『バシキール人』は史料的には新しいものが少ない⁽⁷³⁾。

革命前の研究の特徴は、史料の掘り起し、ならびにロシア国家にバシキール人社会が従属していることを前面に示すことであった。蜂起は「進んだ」ロシア国家へ反抗を示す「遅れた」民族の示す否定的な行動と捉えられたのである。

革命からソ連崩壊までの研究

ソ連時代、オレンブルク遠征に関する研究は多くはないが存在する。何よりも重要なのは階級概念と闘争史観の導入であり、研究は新たな段階に入った。1920～30年代、M. ニキーチンの論文「バシキーリアの植民の基本的局面」⁽⁷⁴⁾、A. Ф. リャザーノフの著作『オレンブルク地方』⁽⁷⁵⁾、C. ビクブラートフの論文「バシキール人蜂起とタタール人」が刊行された⁽⁷⁶⁾。ただし、これらはいわゆる時代的な要請によって書かれたものであるだけに読むときには注意が必要である。最も厳密で間違いが少ない研究は史料集『バシキール自治共和国史史料』（第1部）に収められたA. П. チュローシニコフの論文「バシキーリアにおける封建的諸関係と18世紀のバシキール人諸蜂起」である⁽⁷⁷⁾。チュローシニコフはバシキーリアにおける多くの民族によって構成される住民の階級的構造に十分な注意を払っている。とはいえその構造分析から導かれる結論には疑問が残る。例えば、著者はチェプチャーリやボブイーリといった—前者は移転の許可を得、後者はそれを得ずにバシキーリアへやって来た—非バシキール人のバシキール人領主層への従属状況を指摘した後、この地方に新たにやって来たすべての住民にもそうした関係が普及しているとして、この従属性を過大に評価している点である。

1950年には、H. B. ウスチュゴーフの研究が刊行された。これは1737～39年のバシキール人蜂起に焦点を当てたものであるが、そこでは蜂起の明確な特徴付けがなされていない。ウスチュゴーフはこの運動の「反動的」な要素の存在を指摘しつつも全体的に「進歩的」なものとした。しかし後になってウスチュゴーフはその見方を改めて、17世紀と18世紀前半に発生したすべてのバシキール人蜂起を「反動的」な運動とみなすことになった⁽⁷⁸⁾。この見解は『バシキール自治共和国史概観』（第1巻第1部）に反映している。そこでは新たに発見された膨大な史料の検討の上に立ちつつ、17～18世紀バシキーリアにおける社会運動についての科学的な時代区分と慎重な研究がなされている⁽⁷⁹⁾。

また草稿ながら1958年に書かれたA. H. ウスマーノフの研究計画「モノグラフ『18世紀30年代のバシキーリアにおけるツァリーズムの植民政政策』のプラン」も大変重要である。これは

研究書執筆にあたりその計画を記したものである。当時までの研究の整理をしているだけではなく、史料についてもその性格付けが丁寧になされている⁽⁸⁰⁾。なお計画された専門書は結局、上梓されることはなかった。

1960年前後から未刊行史料に基づく重要な論文が次々と現れた。H. Ф. デミードヴァの中央・地方の行政とバシキール社会との関係⁽⁸¹⁾、C. H. ニグマトゥーリンによる革命以前の研究に対する批判⁽⁸²⁾、И. Г. アクマーノフによる諸蜂起に対する積極的な評価とオレンブルク遠征隊の初期の活動についてである⁽⁸³⁾。これ以降、バシキール人自身による研究が盛んになる。

ソ連崩壊後の研究

ソ連崩壊後、帝政ロシア時代末期からソ連時代初期に盛んになりつつあった地域や郷土の歴史の掘り起こしという動きが復活した。バシキーリアにおける研究もそれに倣った。Ю. H. スミルノフの研究はこうした流れに倣ったものであると同時に、ヴォルガ流域地方のロシアへの併合という新たな見方も提供している⁽⁸⁴⁾。最近、現代ロシアの歴史家 H. H. ペトルヒンツェフは『アンナ・イオアンノヴナ（1730～1740年）の内政』という大著の中で、ロシア政府と地方の関係について、1730年代前半のバシキーリア政策、およびバシキール人の自治に対する制限とそれに対する1735～40年のバシキール人蜂起という問題をアルヒーフ史料に基づいて詳しく論じている⁽⁸⁵⁾。

バシキール人の蜂起の研究に関して、とりわけバシコルトスタンの研究者が積極的に取り組むようになった点は特徴的である。上記のアクマーノフの研究を嚆矢として、P. Г. ブカノヴァ⁽⁸⁶⁾とC. V. タイマーソフ⁽⁸⁷⁾の研究がそれに続いた。また若い世代もそれを継承している。Э. Ю. シリャーエフ、И. Н. バイナザーロフ、M. M. ズリカリナーエフ、И. Н. ビックローフ、そして最近ではИ. Ф. アマンターエフの研究が現れた⁽⁸⁸⁾。これらは先行研究に立脚しながらも、アルヒーフ史料の調査・検討を通してバシキーリア史の独自性を見出そうとしている。

史料集の刊行

ここで上述の史学史ともかかわる一つの史料集の刊行過程について述べよう。バシキール人の歴史に関する根本史料は、1936年に第1部として刊行され始めた『バシキール自治共和国史史料』という一連の史料集である⁽⁸⁹⁾。その第2部として刊行される予定であった史料集が、第6巻としてH. Ф. デミードヴァの編纂により『バシコルトスタン史史料：オレンブルク遠征と18世紀30年代のバシキール人諸蜂起』として近年出版された⁽⁹⁰⁾。実に、第1部が刊行されて70年近く経過した2004年のことである。これは、帝政時代末期のドブロスムィスロフ編の史料集と共に、オレンブルク遠征隊の活動を具体的に示す浩瀚な史料集で、1730年代の蜂起を研究する上で必要不可欠なものである。

この史料集の刊行には複雑な経緯があった。同史料集は地方住民の遠征隊に対するプロテストに関する内容を多く含んでおり、それはすなわち帝政時代からソ連時代にかけて歴史学界のテーゼとなったロシア国家への地方併合の肯定的見解に対する批判とみなされた。以上のような政治的理由から、さらには第二次世界大戦直後の経済的理由や紙不足もあって、史料集はすでに1940～50年代には刊行の準備が整っていたものの出版が許されなかったのである⁽⁹¹⁾。

第2節 ある歴史家の運命

リュバースキーの研究活動と革命

バシキーリア研究に関して、忘れてはならないのがソ連時代初期のM. K. リュバースキーの研究である⁽⁹²⁾。彼は1860年に生まれ、1901年にモスクワ帝国大学で員外教授として働き始め、のちに正教授に昇進し、さらには学長に2度選出され、17年2月までその職にとどまった⁽⁹³⁾。歴史における国家の役割を重視する「国家学派」のリーダーの一人でもある彼の学問的な目標は、師のクリュチューフスキーと同様、ロシア史全体の理解にあった。彼の研究は古代ロシア史に関するものから始まるが⁽⁹⁴⁾、その本領はリトアニアおよび西スラヴの歴史に関するものである⁽⁹⁵⁾。最終的に、リュバースキーはロシア史研究における新たな流れである歴史地理学とロシア植民史の研究を目指すことになった。

当時の知識人同様、革命が彼の人生に多大な影響を及ぼした。1918年7月、A. B. ルナチャールスキー、M. H. ポクロフスキー、そしてH. K. クループスカヤのイニシアティブで、歴史教育の再編すなわち高等教育機関の改革に関する検討が始まった。この問題と大学の状況に関する調査・審議のためにリュバースキーが招かれた。彼は高等教育機関のアカデミックな伝統の保持を強く主張し、ポクロフスキーの改革案に断固反対した。その後に行われた大学の歴史文献学部の改組にもかかわらず、リュバースキーは教育活動を続けることができた。同時に、古文書に関する問題や組織化にも関わった。その活動が評価されて、29年には彼はソ連科学アカデミー正会員に選出されている⁽⁹⁶⁾。

しかし30年代初め、ロシアの歴史学、および歴史の一分野として基礎ができつつあった地方史や地誌学に対する批判キャンペーンが始まる。100人を超す研究者が裁判も開かれずに弾圧されたのである（「アカデミー事件」あるいは「プラトーフ事件」）。始まりはかつてペテルブルク帝国大学教授であったC. Ф. プラトーフ（1860～1933年）の逮捕であった。彼は、1928年から翌年にかけて科学アカデミー図書館長と中世ロシア文化研究の殿堂「プーシキンの家」所長の職を解かれていたが、30年1月には「積極的反ソ運動と反革命組織への参加」を理由に逮捕された。同年8月9日、リュバースキーも逮捕され、当局によって捏造された「自由ロシアのための戦いの全人民同盟」に関与したとされ、これを認める書類に署名させられた。翌31年8月にアカデミー会員の称号の剥奪と共に、ウファーへの流刑5年が宣告され

たのである⁽⁹⁷⁾。

1932～36年まで、バシキール総合学術研究所（後に、改組されてバシキール民族文化学術研究所となる）の第1種学術研究員として登録されたリュバーフスキーは、この研究所の発展に積極的に関わるようになった。ここで、現在に至るまで刊行されていない4つのモノグラフが書かれ、大量の史料や地図が集められた⁽⁹⁸⁾。

1935年11月5日、バシキール自治共和国内務人民委員部はリュバーフスキーの流刑解放について調査を作成した。しかし、結局、彼はモスクワに帰る許可を受け取ることなく、翌36年11月22日に死去した。その死から30年ほど経った67年7月20日に名誉を回復し、69年には剥奪されていたソ連科学アカデミー会員の称号が復活した⁽⁹⁹⁾。ソ連崩壊後の96年、34年にウファーで完成し、本人が外国での出版をも考えていた『太古から20世紀までのロシア植民史概観』が刊行された⁽¹⁰⁰⁾。2006年には、彼が働いていた研究所（現ロシア科学アカデミー・バシコルトスタン共和国歴史・言語・文学研究所ウファー学術センター）の正面横の壁に記念レリーフ（写真10）が掲げられたのである⁽¹⁰¹⁾。

「流刑地」ウファーでの研究

「流刑地」でのリュバーフスキーの研究は刊行されることなく、いまだ図書館の手稿部や古文書館の保管棚に眠ったままである。しかし多くのバシキール人歴史家は彼の遺稿を利用しながら研究しているのも事実である⁽¹⁰²⁾。

リュバーフスキーの未刊行論文の大部分は1955年にロシア国立図書館手稿部に移管されたが、一部はロシア科学アカデミー・ロシア史研究所（旧ソ連邦科学アカデミー歴史研究所）手稿フォンド部とロシア科学アカデミー・バシコルトスタン共和国歴史・言語・文学研究所ウファー学術センター古文書部に取められている。筆者が実際に手に取って閲覧したのはロシア国立図書館手稿部に保管されているタイプ原稿や手稿⁽¹⁰³⁾、およびウファー学術センターに保管されているものである⁽¹⁰⁴⁾。

リュバーフスキーについて調べたB. C. トリツによると、この歴史家の作品はその性格と完成度によって三つのグループに分けられるという。第1はモノグラフないしは研究とみなされるもの。第2は史料集の刊行を目指して準備されたもの。第3は将来バシキール史に関する様々な問題を検討するために集められた広範囲にわたる史料である⁽¹⁰⁵⁾。

モスクワを追放された後のリュバーフスキーはモスクワやレニングラードといった中央の図書館を利用する機会を完全に奪われながらも、ウファーやオレンブルクにある古文書館の史料を涉猟し、それを書き留めながら研究を続けた。原史料のいくつかは散逸していて今ではもはや手にすることができないものもあるだけに、彼の書き残した膨大な文書史料の抜き書きやメモ、そしてモノグラフは貴重である。しかも当時の「紙飢饉」と呼ばれる紙不足のせいもあってか、

手に入った限りの用紙（会計用紙など）や手帳の隙間などに鉛筆でそれらがびっしりと書き込まれており、リュバーフスキーの歴史研究に対する執念が読む者に伝わってくる。

「ロシア史の問題」としてのバシキール史研究

リュバーフスキーはバシキール史をロシア史研究の重要なアクターにまで引き上げた最初の歴史家である。彼はバシキール人の歴史を的確に捉え、「ロシアの権力およびその権力とともにやって来た住民との絶え間のない闘争」としてそれを認識しようとした。それがもっともよく表れているのが、1930年代初頭に書かれた「17世紀と18世紀におけるバシキール人諸蜂起概観」（第1版）である。彼によると、「ロシアに服従した後、民族集団のなかでどの集団もバシキール人ほど自らの過去、および占有している土地や用益地に対する昔からの権利を守り抜くためにかくも多くの努力を払い、血を流した民族は一つとしてなかった。およそ互角とはいえない闘いのなかで、バシキール人はより多くの、数的、物質的、そして疑いもなく精神的な損失を被ったが、あらゆる状況の下で、バシキール人はエトノスとしての結集の強さを示しつつ、民族として人口の多くを吸収することさえできたのである。それゆえ、あらゆる理由と原因をもつこの闘いが、バシキール人の民族史の重要なものであるのは当然のことであった」⁽¹⁰⁶⁾。

研究するにあたってリュバーフスキーが利用したのは、「地方の筆者」による二つの史料集であった。一つはB. A. ノヴィコフが編集した『ウファールの貴族の歴史のための史料集』（初版は1879年刊）であり⁽¹⁰⁷⁾、いま一つはウファール民族文化研究所学術研究者センターの7つの大型本として保管されていたД. А. ヴォールコフの蒐集による手書きの「ウファール市の歴史に関する史料」であった⁽¹⁰⁸⁾。

リュバーフスキーによる研究の特徴は次の4点である。第1は、現代では初期のバシキール史の基本的史料とされ、後に多くのバシキール人歴史家が利用する口伝史料「シェジェレ」の利用は見られないものの、旧ソ連史学で通説となったロシア国家へのバシキール人の「自発的併合」という考え方をとっていないことである。

第2には、国庫への現物税であるヤサークの重要性をモスクワ国家が十分に認識していたことを指摘した点である。政府はバシキール人の相続的土地所有を認め、『ウロジェーニエ（1649年会議法典）』ではロシア人を含めた流入者がバシキール人など地方住民の土地を侵害してはならないと明記されている。事実、17世紀の60～70年代になると、ヤサーク貢納高は増大し、また対外戦争のため経済的な理由からその確保が急務とされた⁽¹⁰⁹⁾。

第3に、バシキール史の問題を一地方の問題としてではなく、ロシア史全体の問題として位置づけて考察しようと試みたことである。バシキール人社会における土地所有者という従来あまり研究されていないテーマが取り上げられた点、またバシキール人において発生した諸事件をロシアの植民という大きな問題として検討した点である。蜂起に関しても、たとえばアレク

セイ・ミハイロヴィチ帝(在位1645～76)の時代に発生する諸都市の蜂起の一環としてバシキール人の蜂起を扱おうとする。そのなかで最大の蜂起がラージンの乱(1670～71年)であった。これは多くの異族人をも含む運動であったが、とりわけバシキール人の動きが長期にわたり特徴的であったという⁽¹¹⁰⁾。その点からバシキール人諸蜂起の原因が明らかにされ、系統立って説明されることになった⁽¹¹¹⁾。

そして第4に、すでに述べた歴史地理学の導入である。地理的地誌的な状況から地方社会を考えようとするのである。これは現在では当然なこととされる考え方であるが、当時としては斬新であった。考え方を広げるために展示会を開催した。

ウファー時代におけるリュバーフスキーの研究のなかで重要だと思われるのが、1930年代初頭に書かれた「17世紀と18世紀におけるバシキール人諸蜂起概観」(第1版)⁽¹¹²⁾と1933～35年に書かれた「17, 18および19世紀のバシキール人の土地所有と土地利用の歴史に関する概要」⁽¹¹³⁾と題するモノグラフである。

バシキール人蜂起についての研究

バシキール人史におけるリュバーフスキーの貢献の一つは、バシキール人蜂起について歴史上の明確な意義を与えたことである。「17世紀と18世紀におけるバシキール人蜂起概観」(第1版)を一瞥しておこう。

このモノグラフはタイプ原稿で364葉からなる。カーボン用紙を重ねてタイプする(通常3枚重ねである)旧ソ連的複写方式によって書かれたものであるが、目録には第1版と記されている。目次の項目を列挙すると次のようになる。第1章「モスクワ支配を承認する以前のバシキール人たち」、第2章「バシキール人におけるモスクワ支配の広がり」、第3章「モスクワ国家〔支配下〕の最初の50年間におけるバシキール人」、第4章「17世紀後半におけるバシキール人の状況の悪化と諸蜂起」、第5章「ピョートルとその後の後継者たちの時代におけるバシキール人、およびバシキール人の新たな蜂起」、第6章「オレンブルクとバシキール人国境における要塞線の建設、および18世紀30年代と40年代初頭のバシキール人諸蜂起」、第7章「1747年のチェプチャーリとボブイーリの騒乱および1755年のバシキール人蜂起」、第8章「プガチョーフ運動におけるバシキール人」、である。以上の構成は現代バシキール人歴史家によって刊行された研究書や概説書でも同じような構成をとっており⁽¹¹⁴⁾、また筆者自身もこの史料を手にとって読んだ2005年段階では同じ筋道でバシキール人の歴史を考えていただけに大変な驚きであった⁽¹¹⁵⁾。

とくに第6章に注目してみよう。1735～36年、オレンブルク遠征隊の動きとそれに対する反対もあって叛乱は大きくなり、カザン道とシベリア道に拡大した。ただ長老たちの間には意思の統一は見られず、叛乱に参加する者、逆に政府側に立つ者など一様ではなかった。この頃、

バシキーリアの住民構成にも変化が見られた。タタール人、ミシャーリ人、マリ人など、新たにバシキーリアにやって来て「受け入れられた人々〔ロシア本土からの逃亡農民など〕」によって住民構成は複雑になり、そのことも運動を複雑にした。1739年、カザーフのハンたちが政府側につくことにより運動は鎮圧される。そのなかで、1736年2月11日付布告はバシキーリア行政に大きな変革をもたらした。バシキール人社会を束ねる長老は終身ではなく、1年毎の選挙によるものとされた。種族・氏族を基に形成されていた以前の郷を新制度の領域で置き換えるものとした。しかしこの新領域は1798年のカントン行政システムの導入後に終了し、バシキーリアは行政的にロシアの一部となる。かくして行政長官が支配するウファー郡となる、というのである。

バシキール人の土地所有と土地利用の歴史についての研究

リュバーフスキーの研究の重要な功績のいま一つはバシキーリアにおける土地所有関係に光をあてたことである。彼は17～18世紀バシキーリアにおける土地所有と土地利用の問題を諸関係の複雑な、そして何よりも法的な複合体として捉えようとした。つまり、一方では、バシキール人の慣習法に基づく関係、また他方では、ロシア国家の法に基づく関係の複合体として、その関係は時代とともに変化するというのである。

さらにリュバーフスキーはバシキール人の相続地には二重の性格があるとした。「ロシア時代」到来以前、バシキール人がすでに占有していた「古来の」土地と、彼らがロシア国家に臣従した後に己のものとなった土地である。とくに、後者は、臣従以前にはまだバシキール人のものではなく、その後、とりわけ社会上層のロシア国家への勤務に対して君主から彼らに下賜されたものである。

リュバーフスキーはバシキール人の相続地と他所からの流入者との関係にも注目する。とくに上記の「概観」の付録として書かれた「バシキール人相続地所有者と17～18世紀の受け入れられた人々」のなかで、バシキーリアへやってきた住民のさまざまな社会的グループの構成が具体的に検討されるのである。

以上のように、リュバーフスキーは明確にバシキール人の歴史をロシア史の問題として取り上げたのである。

リュバーフスキーの研究に関して、ソ連時代後半から現在に至るまで、彼のテーマ、方向性、そして成果が多くバシコルトスタンの歴史家によって継承されている。例えば、И. Г. アクマーノフは17～18世紀のバシキール人叛乱を中心に研究⁽¹¹⁶⁾、А. З. Асфанжаровは18世紀末のカントン行政システム、社会の特権的な身分であるタルハン、そして16世紀から19世紀中葉までの歴史を著⁽¹¹⁷⁾、Р. Г. Букановаは16～18世紀の要塞システムについて研究した⁽¹¹⁸⁾。またА. И. Акмарнофはロシアのバシキーリアにおける法的側面から見た土

地政策の専門家として活躍している⁽¹¹⁹⁾。それらはいずれも1930年代には未開拓であったものの重要なテーマとしてリュバースキーがノートに記し史料を集めたものである。バシコルトスタンの歴史家たちはその方向性に従って研究し、自民族の歴史的遺産を豊かなものにしていくといえよう⁽¹²⁰⁾。

しかしバシキーリアの歴史研究が盛んになったのはソ連崩壊以後である。その背景にあるのは、ロシアと共和国との政治的関係の変化により、研究テーマの選択が比較的自由となり、また史料の利用が容易になったことがあげられる。現代では初期のバシキール史の基本的史料として家系をたどる口伝史料「シェジェレ」が利用されるようになり、また新しい世代の研究者たちは多様なテーマを自ら選ぶことができるようになったのである。

第3節 近年の民族英雄の記憶

2004年7月20日、バシコルトスタン大統領M. F. ラヒーモフによって、サラヴァト生誕250周年を記念して、6月の第2週の10日間を「サラヴァト・ユラーエフの日」とする大統領令（大統領令399号）が發布された⁽¹²¹⁾。

同年6月3日、ウファーでサラヴァト・ユラーエフ生誕250周年を記念して盛大な学術会議が開催された。共和国を挙げての催しで、当時の大統領も開会の辞を述べたほどである。これと前後して刊行された多数のサラヴァト・ユラーエフに関する論文や研究書、啓蒙書、観光案内およびパンフレットが刊行された。とりわけ『サラヴァト・ユラーエフ—百科事典』（ウファー、2004年）は質量ともに壮観である⁽¹²²⁾。また時を同じくして出版された『サラヴァト・ユラーエフ—250年：アルバムとアンソロジー』（ウファー、2004年）は芸術作品のなかで取り上げられたこのバシキール人英雄に関する書物として注目に値する⁽¹²³⁾。サラヴァト自身の創作した詩を集めたものも刊行された⁽¹²⁴⁾。さらには『バシキール人のフォークロアにおけるサラヴァト』（ウファー、2008年）というサラヴァトの生涯や彼の事績についてバシキール人のフォークロアに表れた民俗学的研究もある⁽¹²⁵⁾。学術論文集『サラヴァト・ユラーエフの生涯と作品における自由の思想』（ウファー、2004年）も様々な観点からサラヴァトの歴史上の業績を問うという意味で重要である⁽¹²⁶⁾。

なかでも『サラヴァト・ユラーエフ—百科事典』はブガチョーフ叛乱におけるサラヴァト研究の専門家И. М. Гвөөэзジコヴァを中心に編まれたもので高度な専門性に富んでいる。500頁近くにもおよぶこの事典の中心は何と言ってもブガチョーフ叛乱におけるサラヴァト・ユラーエフの活動が古文書史料を基に簡潔に述べられている点である。また芸術家たちによる民族の英雄の彫像や絵画も載せられている。ちなみにサラヴァト・ユラーエフの項目を引くと10の小項目があることに気が付く。有名な旧ソ連の歴史小説家С. П. Злобин（С. П. Злобин 1903～65）の作品、それを基にして独ソ戦開始の1941年に制作された映画、4幕も

のオペラおよびドラマがサラヴァト・ユラーエフに題材をとっている。さらには、ロシア陸軍の装甲列車、ウファー＝モスクワ間を繋ぐ客船、アイス・ホッケーのチーム、サラヴァト市などはこの英雄の名前を冠している。「サラヴァト・ユラーエフ、シャイタン＝クデイスク郷のバシキール人」という「オレンブルク県通報」紙（1847年4号）に掲載された記事の項目も含まれている。この匿名記事はプガチョーフ叛乱鎮圧直後の1775年5～6月の尋問記録を利用して書かれたサラヴァトに関する最初の記事という点で貴重である⁽¹²⁷⁾。

そして2014年6月、著者も報告したウファーでの国際学術会議「歴史的・文化的広がりにおける個人の役割（バシキール人の民族的英雄にして即興詩人サラヴァト・ユラーエフ生誕260周年に寄せて）」も大きな盛り上がりを見せた。国立バシコルトスタン大学の主催ではあるものの、バシコルトスタン共和国教育省、同科学アカデミー、ロシア連邦文部科学省青少年分野国家政策局が後援する大規模なもので、テレビやラジオの取材陣も来て盛会であった。会議の冒頭には日本の尺八に似た葦製の民族楽器クライの演奏、民族衣装に身を包んだ若者によるサラヴァト作とされる即興詩の朗読が行われた（写真11）。報告内容は一冊の本としてまとめられた⁽¹²⁸⁾。

以上が、サラヴァト・ユラーエフに関する最近の動向およびその学問的高まりを示すものである。しかし、こうした動きの背景には自民族の英雄を顕彰することによって民族意識を高揚したいというバシコルトスタン共和国当局の思惑もある。とはいえ、このような状況に至るまでには長い年月がかかっている。この南ウラルの住民とロシアとの直接的な関係は16世紀中葉に始まり、18世紀に両者の関係に大きな変化がもたらされ、19世紀中頃には完全にロシア国家に組み込まれていくことになる。また同地方だけでなく、沿ヴォルガ地方の諸民族もほぼ同じ時期にロシア国家に帰順した。それゆえ南ウラルの地域を研究することは、その後のロシア国家による植民・民族政策および同地域とロシア国家の関係を考える絶好の素材を与えてくれる。そして何よりもこのサラヴァト・ユラーエフとその父ユライ・アズナリンの生涯がこの地域の歴史を物語っている。さらには、その後、バシキール人の中には自分たちの民族的英雄についての記憶が脈々と生き続けたという点も見逃すことが出来ない事実なのである。

おわりに

以上、文書史料や記憶がどのように残され、またそれを利用していかに歴史叙述がなされるのかを検討してきた。具体的にはバシコルトスタンに存在する記念碑、口伝史料「シェジェレ」に残された過去の記憶、サラヴァト・ユラーエフをめぐる言説を手掛かりとして、バシキール人が自らの過去をどのように認識し、それをどのように叙述してきたのかを考えようとした。

まずウファーにあるふたつの記念碑のもつ意味について考えた。たしかに16世紀中葉以来、バシキール人はロシア国家の一員となってから密接な関係を結んできた。しかしその過程でバ

シキール人は多くの辛酸をなめてきた。ふたつの記念碑は友好とプロテストというまったく反対のバシキール人の姿勢を示しているが、バシキール人とロシア国家との関係はこのふたつの間で揺れ動いてきたのではなからうか。

18世紀以来の歴史家は、ロシア国家への臣従と民族解放の関係をどのように見るべきかを考えてきた。彼らの生きた時代にも影響されながら、両者の関係を見比べつつ、どちらに重点を置くか—すなわちバシキール社会の本質は何か—に頭を悩ませてきたのである。もちろん政治状況や社会状況が及ぼす影響を無視することはできない。

そうしたなか、時代に翻弄されたりユバフスキーの研究は、バシキール史がロシア史のアクターとして論じながら、またバシキール史の本質を蜂起に見たのである。その象徴がサラヴァトであるが、それは現代にまで至るバシキール社会のアイデンティティの拠り所を発見することにもなったのである。

バシコルトスタンにおいては、サラヴァト・ユラーエフに関する学問的高まりを示す事例に溢れている。しかしその背景には、自民族の英雄を顕彰することによって民族意識を高揚したいという共和国当局の思惑もある。また最近になって、バシコルトスタンでもサラヴァトについての見方について変化がみられるようになった。戯画（写真12）が示しているように、「脱サラヴァト化」とでも言える状況の出現である。これも記憶にまつわる問題である。記憶や記念碑は、政治的な思惑によって幾度も構築と破壊を繰り返すのである。しかし、民衆の民族英雄に対する想いは政治的なものとは別の所にあるのかもしれない。

注

- (1) 同様の見解はすでに拙著でも述べたことがある（拙著『ロシア帝国民族統合史の研究—植民政策とバシキール人』北海道大学出版会、2006年、487頁）。
- (2) 時々の政権の意図と記念碑建立の関係については次のような文献がある。1812年の「祖国戦争」（対ナポレオン戦争）の記念碑については、畠山禎「神への感謝と英雄の顕彰—対ナポレオン「祖国戦争」後のロシア—」、若尾裕司／和田光弘編著『歴史の場—史跡・記念碑・記憶—』ミネルヴァ書房、2010年、所収。また17世紀初頭の「動乱時代」のモスクワ解放の立役者ミーニンとポジャルスキーの像については、池本今日子「モスクワ解放とロマノフ選出の記憶—アレクサンドル1世の時代を中心に、17世紀から現代まで—」中近世ロシア研究会編『中近世ロシア研究論文集』2014年、所収。
- (3) 本論で述べたことを考えるための材料を次の文献が提供している。松本彰『記念碑に刻まれたドイツ戦争・革命・統一』東京大学出版会、2012年。同「戦没者記念の比較史のために—ドイツ、アメリカ、ロシア、日本、そして1813年と1914年」『欧米の言語・社会・文化』（新潟大学大学院現代社会文化研究科）第20号、2014年、13頁。同「変わる記念碑」『UP』46（8）、2017年、12～18頁。立石洋子「ロシアにおける第二次世界大戦の記憶と国民意識」成蹊大学法学部編『教養としての政治学入門』ちくま新書、2019年、所収。
- (4) バルト地域については橋本伸也『記憶の政治』岩波書店、2016年が、またアルメニア人虐殺に関しては100 фотосторий о геноциде Армяня. М.: МИГА, 2015が参考になる。
- (5) 若尾裕司・和田光弘編前掲書所収の一連の論文が参考になる。
- (6) ヴォルフガング・イエーガー、クリスティーネ・カイツ編著（小倉正宏、永末和子訳）『ドイツの歴史：

- ドイツ高校歴史教科書】(世界の教科書シリーズ) 明石書店, 2006年。また、南東欧における民主主義と和解のためのセンター (CDRSEE) 企画 (柴弘監訳) 『バルカンの歴史 バルカン近現代史の共通教材』(世界の教科書シリーズ) 明石書店, 2013年, 等を参照されたい。また、8月15日は連合軍に参加したヨーロッパの国々にとって「対日戦勝記念日」であり、この日は今日でもヨーロッパのメディアで取り上げられ記念されている。
- (7) Hosking, Geoffrey A., *Rulers and Victims: the Russians in the Soviet Union*. Harvard University Press. 2006, p. 242; Ellman, Michael and Maksudov, S., "Soviet Deaths in the Great Patriotic War: a Note - World War II" *Europe-Asia Studies*, Vol. 46. No. 4. 1994, pp. 671-680.
- (8) 本論で述べた問題意識に関わるものとして以下の文献が参考になる。藤原帰一「戦争を記憶する—広島・ホロコーストと現在」講談社現代新書, 2001年, 立石洋子「現代ロシアの歴史教育と第二次世界大戦の記憶」『スラヴ研究』62号, 2015年, 橋本伸也「反ファシズム英雄から戦争犯罪者への転落と反転: コーノフ裁判とヨーロッパの歴史・記憶紛争」『スラヴ研究』62号, 2015年。戦争の記念に関するジェフリー・ホスキングの指摘によると、ソ連では退役軍人協会の結成が1956年まで禁じられていたが、その理由はそうした組織がスターリンを批判することを恐れたからではないかという (Hosking, *op.cit.*, p.243)。
- (9) 2014年6月3日, バシコルトスタン大学歴史学講座での談話会の会話から。
- (10) 詳しくは前掲拙著, 第5・8章を参照。
- (11) 同, 287, 292頁。
- (12) Павленко Н.И. К истории южноуральской металлургии в XV111 в. / Материалы научной сессии, посвященной 400-летию присоединения Башкирии к Русскому государству. Уфа, 1958. С. 189.
- (13) E. ホブズボウム, T. レンジャー編 (前川啓治, 梶原景昭他訳) 『創られた伝統』紀伊國屋書店, 1992年 (原著は1983年刊行), バネディクト・アンダーソン (白石隆, 白石さや訳) 『定本 想像の共同体』書籍工房早山, 2007 (原著は2006年刊行), ピエール・ノラ編 (谷川稔監訳) 『記憶の場—フランス国民意識の文化1~3』岩波書店, 2002~2003年 (初出は1984, 86, 92年)。とくに、谷川稔「『記憶の場』の彼方に」同書1~13頁を参照。
- (14) 本稿で利用する文献と史料は、二つの前掲拙著にあげたものが主であるが、それ以外では、次の文献も参考になる。概説書では、*Асфандияров А. З.* Указ. соч.; История Башкортостана с древнейших времен до наших дней. В двух томах. Уфа, 2004. また専門研究では、*Асфандияров А. З.* Кантонное управление в Башкирии (1798-1865 гг.). Уфа, 2005; *Он же.* Башкирские тарханы. Уфа, 2006; *Кулбахтин И. Н. и Н. М.* Наказы народов в уложенную комиссию. 1767-1768 гг. Уфа, 2005; Россия и Башкортостану История отношений, сосотояние и перспективы. Материалы международной научно-практической конференции, посвященной 450-летию добровольного вхождения Башкирии в состав России. 5-6 июня 2007. Уфа, 2007.
- (15) Российский государственный архив древних актов (Далее: РГАДА). Ф. 6. Оп. 1. Д. 518, 519.
- (16) 鳥山成人「ベ・エヌ・ミリュコーフと『国家学派』」『スラヴ研究』12号, 1968年 (後に『ロシア・東欧の国家と社会』恒文社, 1985年, 第9章, 279頁に再録)。
- (17) *Ключевский В. О.* Сочинения. Т. 1. М., 1956. С. 31 (八重樫喬任訳『ロシア史講話』1, 恒文社, 1979年, 37頁)。
- (18) *Любавский М.К.* Обзор истории русской колонизации. М.: Изд-во МГУ. 1996.
- (19) 詳しくは、拙稿「ロシア帝国の拡大とロシア人—ロシア人農民による移住・植民およびフロンティアの拡大」駒井洋監修/駒井洋・江成幸編集『ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ』明石書店, 2009年を参照されたい。
- (20) たとえば、最近のバシコルトスタンにおける「併合」研究の動向を示す例として次を参照。*Асфандияров А. З.* Башкиры после вхождения в состав России (вторая половина XVI – первая половина XIX в.). Уфа, 2006; Россия и Башкортостан. История отношений, состояние и перспективы. Материалы международной научно-практической конференции, посвященной 450-летию добровольного вхождения Башкирии в состав России. 5-6 июня 2007 г. Уфа, 2007.

記憶すること、歴史を叙述すること

- (21) 詳しくは、前掲拙著、17～24頁を参照されたい。西山克典は拙著に対する書評のなかで、筆者が「『併合』は平和裡に進展した」（『史学雑誌』第117編第2号、2007年、95頁）とする。しかし、その指摘は誤読によるものである。
- (22) *Трепавлов В. В.* Башкортостан в эпоху Салавата: два столетия Российского подданства / Идея свободы в жизни и творчестве Салавата Юлаева. Уфа, 2004; *Он же.* Присоединение народов Поволжья и Южного Урала / Российская империя от истоков до начала XIX века. Очерки социально-политической и экономической истории. М., 2011; *Он же.* Присоединение народов Поволжья и Южного Урала / Российское государство от истоков до XIX века: Территория и власть. М., 2012.
- (23) Научно-исследовательский отдел рукописей Российской государственной библиотеки (Далее: НИОР РГБ). Ф. 364 (Любавский М.К.). Карт. V. Ед. хр. 1. Л. 1. 拙稿「ロシア史における民族史研究の意味と問題—バシキール史研究とリュバースキー」『歴史学研究』946、2016年、49頁。
- (24) 2016年6月4日のバシコルトスタン教育大学での講演後の質疑から。
- (25) 前掲拙著、116～117、137～175頁。
- (26) 拙稿「バルティースキー・ポルトの囚人サラヴァト・ユラーエフとその周辺—帝政ロシアにおける地域史研究の試み」『駿台史学』132号、2007年、23～25頁。
- (27) この節は次の記述を基礎にしている。前掲拙著、第2章。
- (28) Полное собрание русских летописей (Далее: ПСРЛ). Т. XIII. первая половина. СПб., 1904. С. 165.
- (29) Там же.
- (30) ПСРЛ. Т. XIII. первая половина. С. 221.
- (31) История Башкортостана с древнейших времен до 60-х годов XIX в./ Усманов Х. Ф. (под ответ. ред.) Уфа, 1996. С. 137.
- (32) Башкирские шежере / Кузеев Р. Г. (составление, перевод текстов, введение и комментарии). Уфа, 1960. С. 33, 117.
- (33) *Карамзин Н. М.* История государства Российского. Т. VIII. СПб., 1842. С. 135.
- (34) *Кузеев Р. Г.* Добровольное присоединение Башкирии к Русскому государству – Поворотный пункт в истории края // Историческое значение добровольного присоединения Башкирии к Русскому государству. Уфа, 1982. С. 10-11.
- (35) Башкирские шежере. С. 33; Башкирские родсловные. Выпуск первый. Издание на русском языке. Уфа, 2002. С. 56-57.
- (36) この節は前掲拙著、第8章を基礎にしている。
- (37) РГАДА. Ф. 6. Д. 427. Л. 15; Крестьянская война 1773-1775 гг. на территории Башкирии. док. №192. С. 300; док. №193. С. 303; док. №215. С. 340.
- (38) РГАДА. Ф. 6. Д. 427. Л. 15; Крестьянская война 1773-1775 гг. на территории Башкирии. док. №192. С. 300; док. №211. С. 336.
- (39) Там же. док. №215. С. 340; Салават Юлаев. К 200 летию со дня рождения. Уфа, 1952. С. 8; Советская историческая энциклопедия. М., 1969. Т. 12. С. 482; Большая советская энциклопедия. Изд. 3-е. Т. 22. М., 1975. С. 508.
- (40) *Нефедов Ф. Д.* Движение среди башкир перед Пугачевским бунтом. Салават, башкирский батыр // Русское богатство. 1880. октябрь. С. 97.
- (41) *Гвоздиков И. М.* Салават Юлаев. Исследование документальных источников. Уфа, 1982. С. 39.
- (42) РГАДА. Ф. 6. Д. 593. Л. 328-333 об.; Крестьянская война 1773-1775 гг. На территории Башкирии. Сборник документов. Уфа, 1975. № 200. С. 318-320.
- (43) РГАДА. Ф. 6. Д. 593. л. 332 и 332 об.; Крестьянская война 1773-1775 гг. № 201. С. 320-321.
- (44) РГАДА. Ф. 6. Д. 427. Л. 9-10; Крестьянская война 1773-1775 гг. на территории Башкирии. № 193. С. 303.
- (45) Крей・バルタシェフはユライとサラヴァトの活動について政府よりの証言をしている (РГАДА. Ф. 7.

- Оп. 2. Д. 2043. Ч.14. Л. 156об., 157об.-158, 159об.-160)。
- (46) Документы ставки Е.И.Пугачева, повстанческих властей и учреждений. М., 1975. С. 8.
- (47) Российский государственный исторический архив (Далее: РГИА). Ф. 892. Оп. 1. Д. 384. Л. 1; Материалы по истории Башкирской АССР. Т. IV. Ч. 2. № 405. С. 166-171.
- (48) РГИА. Ф. 892. Оп. 1. Д. 384. Л. 1об.; Материалы по истории Башкирской АССР. М.; Л., 1936. Ч. 1. № 192. С. 246-248.
- (49) Там же. Т.IV. Ч. 2. С. 595.
- (50) РГИА. Ф. 892. Оп. 1. Д. 382. Л. 1об.-21; *Гвоздикова И. М.* Указ. соч. С. 186.
- (51) Там же. С. 186-187.
- (52) Материалы по истории Башкирской АССР. Т. IV. Ч. 2. С. 595.
- (53) *Гвоздикова И.М.* Указ. соч. С. 187.
- (54) *Нефедов Ф.Д.* Движение среди башкир перед Пугачевским бунтом. Салават, башкирский батыр // Русское богатство. 1880. Октябрь. С. 98.
- (55) Салават Юлаев. С. 10-11.
- (56) Россия. Полное географическое описание нашего отечества. Урал и приуралье / Семенов-Тян-Шанский В.П. (под ред.) Т.5. СПб., 1914. С. 476.
- (57) РГАДА. Ф. 6. Д. 593. Л. 328; Крестьянская война. № 200. С. 317. 尋問記録は当局の書記官が書き留めたものであるため、プガチョーフを「悪人」としている。
- (58) РГАДА. Ф. 1100. Д. 9. Л. 131, 132; Крестьянская война. № 118. С. 192-193.
- (59) РГАДА. Ф. 1100. Д. 9. Л. 132; Крестьянская война. № 118. С. 193.
- (60) 前掲拙著, 13 ~ 27 頁を参照されたい。
- (61) *Акманов И.Г.* Башкирские восстания XVII-XVIII вв. / Программа спецкурса / Уфа, 1992 (Изд. 2-е). С. 10-11.
- (62) 拙著『十八世紀ロシアの『探検』と変容する空間認識—И. К. キリーロフのオレンブルク遠征とヤーロフ事件』山川出版社, 2016年, 16 ~ 21 頁。
- (63) *Татищев В.Н.* История российская. 7 тт. М.; Л., 1962-68.
- (64) История Башкирского народа в семь томах. Т. 3. Уфа: Гилем, 2011. С. 168-169.
- (65) *Рычков П.И.* История Оренбургская (1730-1750). Оренбург, 1886 (初版は 1759 年に刊行). 近年, 新版が刊行された。*Он же.* История Оренбургская по учреждении Оренбургской губернии. Уфа, 2001. また『オレンブルク県地誌』も重要である。*Он же.* Топография Оренбургской губернии. Оренбург, 1887 (新版はウファーで 1999 年に刊行)。
- (66) *Соловьев С.М.* История России с древнейших времен. М.: Мысль, 1993. Кн. X. Т. 20. С. 571-594.
- (67) *Фирсов Н.А.* Иностранческое население прежднего Казанского царства в Новой России до 1762 г. и колонизация закамских земель. Казань, 1869.
- (68) *Витевский В.Н.* И.И. Неплюев и Оренбургский край в прежнем его составе до 1758 г. Вып. 1. Казань, 1889; Вып. 3. 1891; Вып. 5. 1897.
- (69) *Игнатьев Р.Г.* И.К. Кирилов, основатель Оренбургского края // Уфимские ведомости. 1880. №№ 14-16, 18, 20, 23-25, 27, 28, 32-34; *Он же.* В.Н. Татищев, второй начальник Оренбургского края // Там же. 1881. №№ 4, 6, 7, 26-32, 34-38, 40, 42, 46, 47.
- (70) *Он же.* Хроника достопамятных событий Уфимской губернии / Памятная книжка Уфимской губернии. Уфа, 1873.
- (71) *Добросмыслов А.И.* Башкирский бунт в 1735, 1736 и 1737 гг. // Труды Оренбургской ученой архивной комиссии. Вып. VIII. Оренбург, 1900.
- (72) Материалы по истории России. Сборник указов и других документов, касающихся управления и устройства Оренбургского края. 1734 год. По архивным документам тургайского областного правления /

記憶すること、歴史を叙述すること

- Добросмылов А.Н. (сост.) Т. 1. Оренбург, 1900; Материалы по истории России. Сборник указов и других документов, касающихся управления и устройства Оренбургского края. 1735 и 1736 годы. По архивным документам тургайского областного правления / Добросмылов А.Н. (сост.) Т. 2. Оренбург, 1900.
- (73) *Фироненко В.* Башкиры // Вестник Оренбургского учебного округа. 1913. Отд. III. №№ 2, 5-8; 1914. Отд. III №№ 2, 3, 8.
- (74) *Никитин М.* Основные моменты колонизации Башкирии // Хозяйство Башкирии. 1928. №№ 6-7.
- (75) *Рязанов А.Ф.* Оренбургский край. Оренбург, 1928.
- (76) *Бикбуратов С.* Башкирские восстания и татары // Вестник научного общества татароведения. Казань, 1930. №№ 9-10.
- (77) *Чулошников А.П.* Феодалные отношения в Башкирии и башкирские восстания в XVII и первой половине XVIII в. / Материалы по истории Башкирской АССР. Ч. 1. М., 1936. С. 60-62.
- (78) *Устогов Н.В.* Башкирское восстание 1737-1739 гг. М.; Л., 1950.
- (79) Очерки по истории Башкирской АССР. Т. 1. Ч. 1. Уфа, 1956. この『概説』をめぐって行われたソヴェト科学アカデミー歴史学研究所での検討と批判、およびそれに基づく修正については、拙稿「ブガチョーフ叛乱前夜のバシキール人—その社会的変貌」『社会経済史学』第49巻第2号、1983年、52～53頁を参照されたい。
- (80) Научный архив Уфимского научного центра Российской академической наук (Далее: НА УНЦ РАН). Ф. 51. Оп. 1. Д. 96 (*Усманов А.Н.* План монографии «Колониальная политика царизма в башкирии в 30-е годы XVIII века». 1958). Л. 1-41.
- (81) *Демидова Н.Ф.* Социально-экономические отношения в Башкирии в первой четверти XVIII в. / Материалы научной сессии, посвященной 400-летию присоединения Башкирии к русскому государству. Уфа, 1958; *Она же.* Управление Башкирией и повинности населения Уфимской провинции в первой трети XVIII века // Исторические записки. Т. 68. М., 1961; *Она же.* Бюрократизация государственного аппарата абсолютизма в XVII в. / Абсолютизм в России (XVII-XVIII вв.). М., 1964.
- (82) *Нигматуллин С.Н.* О характере башкирского восстания 1735-1740 гг. // Из истории Башкирии. Ч. 2. Уфа, 1963. С. 44-58.
- (83) *Акманов И.Г.* Организация Оренбургской экспедиции и начало восстания 1735-1740 гг. // Очерки истории дореволюционной России. Уфа, 1975. Вып. 2; *Он же.* Башкирские восстания XVI – первой четверти XVIII века. Уфа, 1978; *Он же.* Социально-экономическое развитие Башкирии во второй половине XVI- первой половине XVIII века. Уфа, 1981; *Он же.* Башкирия в составе Российского государства в XVII – первой половине XVIII в. Свердловск, 1991.
- (84) *Смирнов Ю.* Оренбургская экспедиция (комиссия) и присоединение заволжья к России в 30-40-е гг. XVIII века. Самара, 1997.
- (85) *Петрухинцев Н.Н.* Внутренняя политика Анны Иоанновны (1730-1740). М.: РОССПЭН, 2014. С. 382-630.
- (86) *Буканова Р.Г.* Города-крепости юго-востока России в XVIII веке: История становления городов на территории Башкирии. Уфа: Китап, 1997. С. 147.
- (87) *Таймасов С.У.* Карасакар в Казахстане // Ватандаш. 2006. № 1. С. 45-51; *Он же.* Роль Оренбургской экспедиции Башкирии к России (1730-е гг.) // Вопросы истории. 2008. № 2; *Он же.* Башкирско-казахские отношения в XVIII веке. М., 2009. С. 285.
- (88) *Шияев Э.Ю.* Основание крепостей в Башкортостане при первых начальниках Оренбургской экспедиции 1734-1741 гг. Автреф. дис...канд. ист. наук. Уфа, 1995; *Байназаров И.Г.* Тевкелев и его роль в осуществлении юго-восточной политики России в 30-50- гг. XVIII века. Автреф. дис...канд. ист. наук. Уфа: РИО БашГУ, 2005. С. 18-19; *Зулькарнаев М.М.* Образование и деятельность Оренбургской экспедиции при И.К. Кирилове (1734-1737 гг.). Автреф. дис...канд. ист. наук. Уфа: РИО БашГУ, 2005; *Биккулов И.Н.* Карасакар-загадочная личность в истории Башкортостана / Актуальные проблемы отечественной политической и социально-

- экономической истории. Уфа, 2010. С. 22-31; *Амантаев И.Ф.* Башкирское восстание 1739-1740 гг. Автореф. дис...канд. ист. наук. Уфа: РИО БашГУ, 2012.
- (89) Материалы по истории Башкирской АССР. Ч. 1. М.; Л., 1936; Т. III. М.; Л., 1949; Т. IV. Ч.1, 2. М., 1956; Т. V. М., 1960.
- (90) Материалы по истории Башкортостана. Оренбургская экспедиция и башкирские восстания 30-х годов XVIII в. / Автор-составитель Н.Ф. Демидова. Т. VI. Уфа, 2002.
- (91) 拙稿「ウファーでの『発見』!？」『ロシア史研ニューズレター』58号, 2005年, 4~5頁を参照されたい。2004年当時, 史料集がなかなか刊行されなかった理由を, ウファーの研究者が経済的な困難さという点のみで説明したのは, 中央政府に対する地方の従順な態度を示すものとして特徴的であった。しかし近年, ウファーの歴史家 M. H. ファルフシャトフのように, 明確に政治的理由を挙げる研究者が出現したことは, 地方と中央との関係に変化が現れたという証であろうか (2013年12月16日のファルフシャトフ氏と筆者との会談より)。
- (92) リュバーフスキーの生涯とその研究については次を参照されたい。Дегтярев А.Я., Иванов Ю.Ф., Карев Д.В. Академик М.К. Любавский и его наследие / М.К. Любавский. Обзор истории русской колонизации с древнейших времен и до XX века. М. 1996. С. 8-72; Иванов Ю.Ф. Любавский М.К. – выдающийся ученый и педагог // Вопросы истории. № 10. 2001. С. 150-161; Буканова Р.Г., Фешкин В.Н. Башкиры в трудах русских ученых исследователей. Уфа: Китап, 2007. С. 171-177; Матвей Кузьмич Любавский: историк и человек. К 145-летию со дня рождения: Материалы региональной научно-практической конференции 15 декабря 2005 года. Уфа: Изд-во БГПУ, 2008; Матвей Кузьмич Любавский: К 150-летию ученого // Труды исторического факультета Санкт-Петербургского государственного университета. 2013. № 12. 拙稿「М. К. Рюбауфский-文書とバシキーリア」『窓』133, 2005年。前掲拙稿「ロシア史における民族史研究の意味と問題—バシキーリ史研究とリュバーフスキー」。とくに, 本稿は最後の文献の内容と重複している。
- (93) Буканова Р.Г., Фешкин В.Н. Указ. соч. С. 172-173.
- (94) Любавский М.К. Древняя русская история. Читан. на выш. женск. Курс. 1908/1909. Учеб. п. М., [б. г.].
- (95) Он же. Областное деление и местное управление Литовско-Русского государства ко времени издания первого литовского статута. М., 1893; Он же. Литовско-Русский сейм. Опыт по истории учреждения в связи с внутренним строем и внешнего жизнью государства. М., 1900; Он же. Очерки истории Литовско-русского государства до Люблинской унии включительно. М., 1910 (2-е изд. М., 1915); Он же. История западных славян (прибалтских, чехов и поляков). Лекции, читанные в Московском Университете и на вышних женских курсах в Москве. М., 1918.
- (96) Иванов Ю.Ф. Указ. стат. С. 159; Буканова Р.Г., Фешкин В.Н. Указ. соч. С. 173-174.
- (97) Иванов Ю.Ф. Указ. стат. С. 159; Буканова Р.Г., Фешкин В.Н. Указ. соч. С. 174-175.
- (98) Там же. С. 175.
- (99) Буканова Р.Г., Фешкин В.Н. Указ. соч. С. 175..
- (100) Любавский М. К. Обзор русской истории с древнейших времен и до XX века. М.: Издательство Московского университета, 1996.
- (101) 2015年9月にウファーを訪れた際, この研究所の正面横の壁に, リュバーフスキーを称えるレリーフを確認することができた。
- (102) バシコルスタン大学歴史学部教授のイレクとアイトガンのアクマーノフ父子は, 2世代にわたって, その遺稿をすべて筆写したという (2005年2月10日の И. Г. Акмаруфов との会談より)。
- (103) НИОР РГБ. Ф. 364 (Любавский М.К.). Карт. V. Ед. хр. 1-3; Карт. VI. Ед. хр.1-3; Карт. VII. Ед. хр. 1-11; Карт. VIII. Ед. хр. 1-15; Карт. IX. Ед. хр. 1-5; Карт. 10. Ед. хр. 1.
- (104) НА УНЦ РАН. Ф. 3. Оп. 2. Д. 28, 35,151.
- (105) Тольц В.С. Материалы М.К.Любавского по истории Башкирии / Из истории феодализма и капитализма в Башкирии. Уфа, 1971. С. 221-230.

記憶すること、歴史を叙述すること

- (106) НИОР РГБ. Ф. 364. Карт. V. Ед. хр. 1. Л. 1.
- (107) Сборник материалов для истории Уфимского дворянства / В.А. Новиков (сост.) Уфа, 1903. 2-е изд.
- (108) НА УНЦ РАН. Ф. 23. Оп. 1. Д. 1; См. НИОР РГБ. Ф. 364. Карт. V. Ед. хр. 1. Л. 1-2.
- (109) Там же. Л. 58 и далее.
- (110) Там же. Л. 64.
- (111) *Буканова Р.Г., Фешкин В.Н.* Указ. соч. С. 175.
- (112) НИОР РГБ. Ф. 364. Карт. V. Ед. хр. 1-3.
- (113) Там же. Карт. VI. Ед. хр. 1-2; Карт. VII. Ед. хр. 1, 2а-б, 3.
- (114) 例えば最近刊行された7巻ものの概説書の第4巻(19世紀前半)までにそうした点がみられる。*История Башкирского народа в семь томах.* Уфа: Гилем, 2009-2012.
- (115) 筆者は、この筋道で19世紀中葉までのバシキール史を再構成していた。前掲拙著『ロシア帝国民族統合史の研究』はその成果である。
- (116) *Акманов И. Г.* Организация Оренбургской экспедиции и начало восстания 1735-1740 гг. // *Очерки истории дореволюционной России.* Уфа, 1975. Вып. 2; *Он же.* Башкирские восстания XVI – первой четверти XVIII века. Уфа, 1978; *Он же.* Социально-экономическое развитие Башкирии во второй половине XVI- первой половине XVIII века. Уфа, 1981; *Он же.* Башкирия в составе Российского государства в XVII – первой половине XVIII в. Свердловск, 1991; *Он же.* Допрос вождя восстания 1735-1736 гг. Кильмяка Нурушева / *Уникальные источники по истории Башкортостана.* Уфа, 2001.
- (117) *Асфандияров А.З.* Кантонное управление в Башкирии (1798-1865 гг.). Уфа: Китап, 2005; *Он же.* Башкирия после вхождения в состав России (вторая половина XVI- первая половина XIX в.). Уфа: Китап, 2006; *Он же.* Башкирские тарханы. Уфа: Китап, 2006.
- (118) *Буканова Р.Г.* Города-крепости юго-востока России в XVIII веке: История становления городов на территории Башкирии. Уфа: Китап, 1997; *Она же.* Города-крепости на территории Башкортостана в XVI- XVII вв. Уфа: Китап, 2010.
- (119) *Акманов А.И.* Земельная политика царского правительства в Башкирии (вторая половина XVI- начало XX вв.). Уфа: Китап, 2000; *Он же.* Земельные отношения в Башкортостане и башкирское землевладение во второй половине XVI –началом XX в. Уфа: Китап, 2007.
- (120) 2004年11月、リュバースキーの孫にあたるТ.Л.リヴァノヴナ氏に会って話を伺う機会を得た。その折、彼女はリュバースキーがバシキール史の学問的な水準をモスクワにおけるロシア史研究のそれにまで高めたと述べた。
- (121) *Насломленный дух Салавата.* Стерлитмак. 2006. С. 2.
- (122) *Салават Юлаев.* Энциклопедия. Уфа, 2004.
- (123) *Салават Юлаев.* 250: альбом-антология. Уфа, 2004.
- (124) *Салават Юлаев.* Полет Орла. Стихи, песни. Уфа; СПб., 2003.
- (125) *Салаут Башкорт.* фольклорында. 2 тт. Уфа, 2008.
- (126) *Идея свободы в жизни и творчестве Салавата Юлаева.* Уфа, 2004.
- (127) *Сарава́т · Юла́ев* に関する研究史については次を参照されたい。前掲拙著『ロシア帝国民族統合史の研究』、とくに序章。
- (128) Роль личность в историко-культурном пространстве (к 260-летию национального героя башкирского народа, поэта-импровизатора Салавата-Юлаева). Материалы международной научно-практической конференции (г. Уфа, 4 июня 2014 г.). Уфа: РИЦ БашГУ. 2014.

付 記

本稿は日本学術振興会科学研究費・基盤(C)(課題番号17K03192:近世ロシア帝国に生きた民族の軌跡と記憶についての研究,研究代表者:豊川浩一)の研究成果の一部である。

Remembrance, Commemoration, and Historical Narratives: Memory and History Examined through the Perception of Two Monuments in Ufa

TOYOKAWA Koichi

In the capital of the Republic of Bashkortostan of the Russian Federation, there are two monuments that show the conflicting relationship between Russians and Bashkirs, which were erected at about the same time. One is the “National Friendship Monument” built in 1965 to commemorate the 400th anniversary of the “Voluntary Annexation” of the Russian state, and it is a statue of Saravat Yuraev, a Bashkir national hero, built two years later in 1967. The former shows that the Bashkirs became members of the Russian state of their own volition, and that their relationship was always “friendly.” The latter is an honour of a person who actively participated in the Pugachev Revolt (1773-1775) in opposition to Russia’s colonization policy and was swept away from his hometown and died after he was suppressed. It is suggestive in considering the history of the Russian state and the peoples in this region in turn that both are monuments which convey one side of the historical fact, and each shows the posture of the contradictory Bashkir people to the Russian state of friendship and the protest.

It tries to examine how document history and memory were left and used, and how it is described historically. In particular, let’s consider how the Bashkirs recognized the past and described it, using various monuments present in Bashkortostan and discourses about the Bashkir national hero, Saravat Yulaev.

Keywords: Historical Narratives, Historical Materials, Monuments, Memory, Saravat Yulaev



写真1 民族友好記念碑全景
(ウファ、2005年2月、筆者撮影)



写真2 民族友好記念碑台座部分(1)
バシキール人(右)とロシア人の「融和的
出会い」を象徴するレリーフ



写真3 民族友好記念碑台座部分(2)
ロシアに臣従することを願い出るバシキール人



写真4 民族友好記念碑台座部分(3)
「1965年、バシキール人のロシアへの自発的
併合400年を記念して建設された」とある



写真5 サラヴァト・ユラーエフの銅像
(ウファ、2014年6月、筆者撮影)



写真6 サラヴァト・ユラーエフ銅像の説明
「バシキール人の民族の英雄サラヴァト・ユラーエフ
に。この記念碑は、1967年、彫刻家タヴァーシエフ、
建築家ガイヌトジーノフによって作られた」とある
(上にバシキール語、下にロシア語による記述)



写真7 サラヴァト・ユラーエフ博物館前の庭に建っているサラヴァト・ユラーエフの胸像
(サラヴァト地区、2014年6月、筆者撮影)



写真8 サラヴァト・ユラーエフの胸像
(パルデイスキ市、2007年9月、筆者撮影)



写真9 現代版「シェジェレ」
(系統樹=系譜図)



写真10 リュバーフスキーについてのレリーフ
左の板には、「ロシア科学アカデミー・ウファー学術センター歴史・言語・文学研究所で、1932～1935年、著名な研究者で歴史家、モスクワ大学学長にして科学アカデミー会員であるマトヴェイ・クジミチ・リュバーフスキーが働いていた」とある。(ウファー、2014年6月、筆者撮影)



写真11 サラヴァトについての研究集会
(生誕260周年)

サラヴァトの詩を披露している様子(ウファー、バシコルスタン大学、2014年6月、筆者撮影)

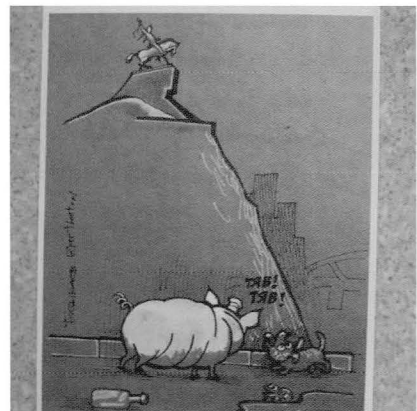


写真12 ブズィカエフのサラヴァト像に対する戯画